

筑後東部地区遺跡群Ⅸ

福岡県筑後市大字鶴田所在遺跡の調査

筑後市文化財調査報告書

第62集

2005

筑後市教育委員会
(財)元興寺文化財研究所

ちくごとうぶちくいせきぐん
筑後東部地区遺跡群Ⅸ

むつえ
鶴田武津恵遺跡

ならはら
鶴田栖原遺跡第2次調査

2005

筑後市教育委員会
(財)元興寺文化財研究所

序

筑後市の東部地区ほ場整備事業に伴う発掘調査は、平成5年度に始まり平成10年度に無事終了することができました。報告書作成にも多くの時間が割かれ、今回の報告書でその最終巻を迎えます。

この調査は筑後市東南部における広大な予定地のなかで、遺構が存在し、しかも工事に伴って消滅すると考えられる部分に限って行いました。そのため、断片的な情報しか得られない結果となっていますが、それでも29遺跡41地点を調査するにいたり、それぞれの地区で貴重なデータを提供してくれる結果となりました。

拙い冊子ではありますが、筑後市の歴史解明に役立つことを期待しますとともに、文化財保護の一助になれば幸いに存じます。

最後になりましたが、文化財調査に理解を示された地権者および工事関係者の方々、また当方の技師の指導のもと、汗水を流されました現場及び整理に従事されました方々に感謝する次第であります。

平成17年3月

筑後市教育委員会
教育長 城戸一男

例 言

1. 本書は筑後東部地区ほ場整備事業に伴う発掘調査のうち、筑後市大字鶴田所在の鶴田武津江（つるたむつえ）遺跡と鶴田栢原（つるたならはら）遺跡第2次調査に関する報告書である。
2. 発掘調査は平成7年度に筑後市教育委員会が実施し、整理及び報告書の作成は平成16年度に（財）元興寺文化財研究所へ委託して実施した。なお調査及び整理の関係者は、第I章に記載した。
3. 本書に使用した座標は、国土調査法第II座標系で、水準はT.Pを用いている。また図中の方位は特に記載のない限り、座標北（G.N.）を指している。
4. 発掘調査に関する写真撮影および個別の遺構実測図作成は塚本英子が行った。また両地点とも航空写真測量による全体図を作成し、その作業は写測エンジニアリング株式会社に委託した。また遺物の実測図は、平塚あけみ、仲井光代、船築紀子が作成し、遺物写真は狭川真一が撮影した。図版の浄書は岡本広義、船築が行った。
5. 本書の執筆は、第I章を小林勇作、第II章は第58集の再録、第III章における石器の解説を船築、他は狭川が担当した。
6. 本書の編集は、小林が監修し、狭川が担当した。
7. 本書に関わる資料（遺物・図面・写真・拓本等）は、すべて筑後市教育委員会が管理・保管している。

目 次

| | |
|-----------------|----|
| I. 調査経過と体制 | 1 |
| II. 位置と環境 | 3 |
| III. 調査成果 | |
| (1) 鶴田武津恵遺跡 | 4 |
| (2) 鶴田栢原遺跡第2次調査 | 14 |
| IV. 総 括 | 21 |

I. 調査経過と体制

今回報告する筑後東部地区遺跡群Ⅸは、福岡県筑後川水系農地開発事務所からの依頼を受けて、平成7年度に筑後市教育委員会が実施した県営ほ場整備事業筑後東部地区平成7年度工事に係わる2遺跡の発掘調査成果である。ほ場整備事業で行われる水路新設及び耕作面工事によって遺構が掘削・削平を受ける部分については発掘調査を実施し、その他の削平等を受けない部分については遺跡保存の措置を講じている。なお、発掘調査費用については国・県・市において負担された。

以下、調査並びに整理報告の組織について記載する。

調査組織

1. 発掘調査

平成7年度（1995年度）

筑後市教育委員会

総括 教育長

森田 基之

教育部長

津留 忠義

庶務 社会教育課長

下川 雅晴（～9月30日）・山口 逸郎（10月1日～）

社会教育係長

本村 正晴

社会教育係

永見 秀徳・小林 勇作・田中 剛

塚本 英子（囑託：調査担当）・大島真一郎（囑託）

2. 報告書作成

平成16年度（2004年度）

筑後市教育委員会

総括 教育長

城戸 一男

教育部長

菰原 修

庶務 社会教育課長

田中 僚一

文化スポーツ係長

成清 平和

文化スポーツ係主査

綾部 純

文化スポーツ係

田中 純彦・永見 秀徳・小林 勇作・上村 英士

立石 真二（囑託）・阿比留士朗（囑託）

元興寺文化財研究所

理事長

辻村 泰善

所長

坪井 清足

事務局長

奥洞 二郎

研究部長

狭川 真一（兼人文考古学研究室長）

人文考古学研究室（考古担当）

佐藤 亜聖（主任研究員）

岡本 広義（主任技師）

藤井 章徳（専門研究員）

3. 発掘調査参加者

地元有志

4. 整理作業参加者

平塚あけみ（筑後市教育委員会） 武田浩子、仲井光代、小田真由美、大西美奈子、鉛谷曜子、小野亜由美、神明美、船築紀子、山本真琴、寺岡希華（元興寺文化財研究所）

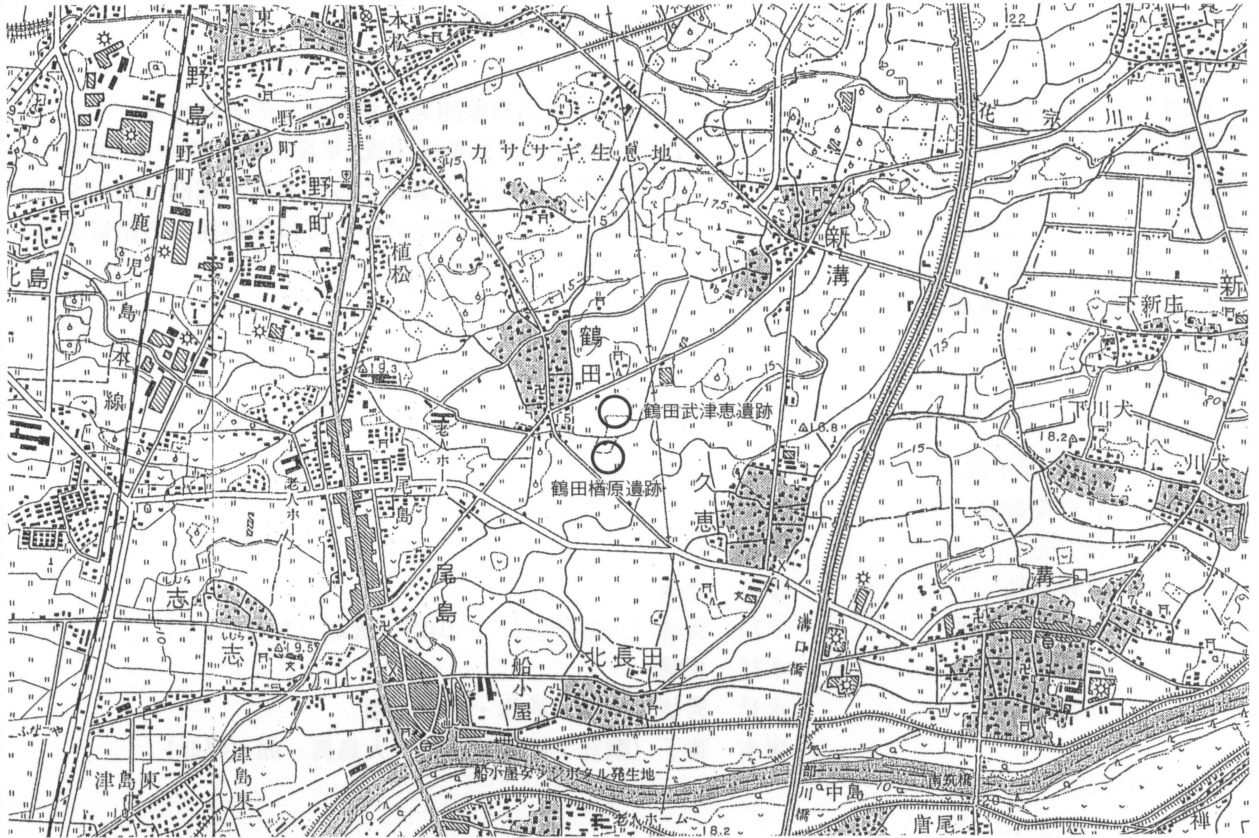


Fig.1 調査遺跡位置図 (1/25,000)

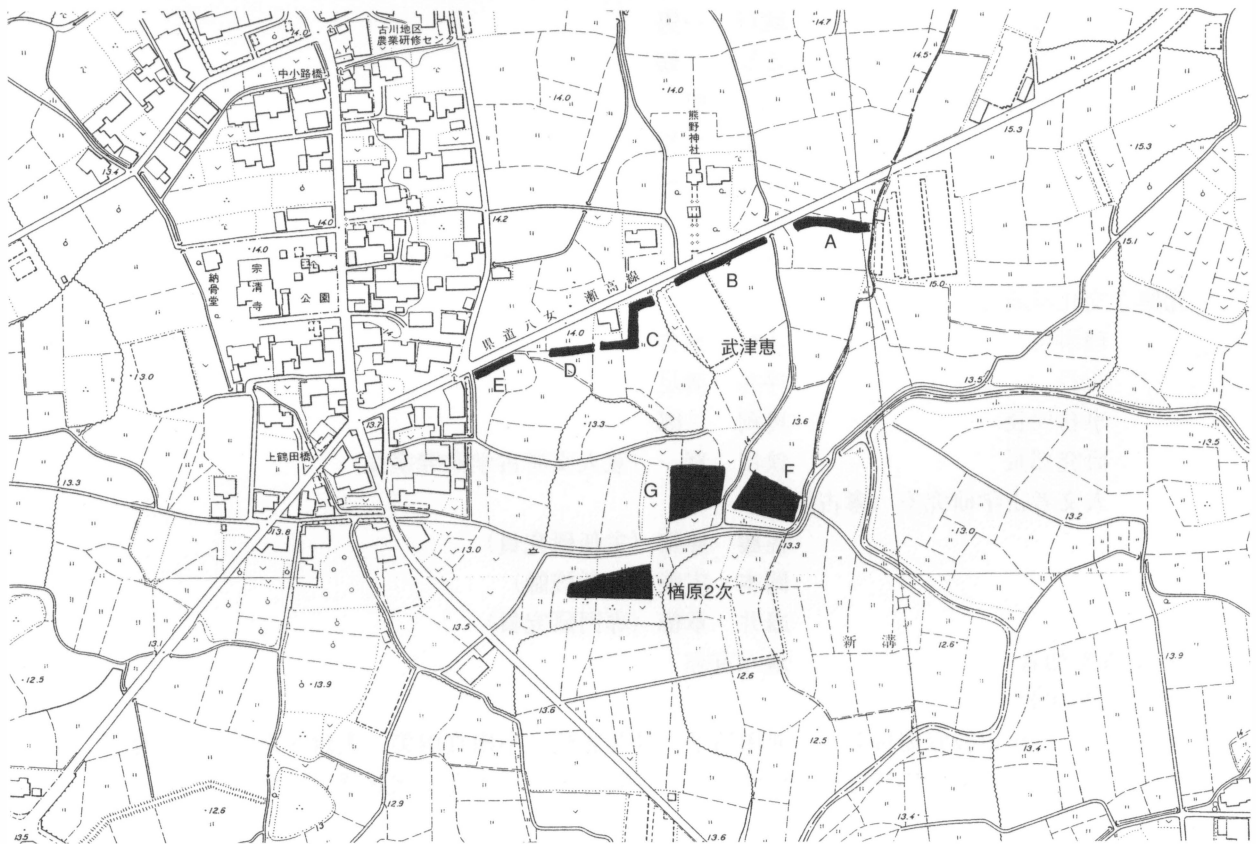


Fig.2 調査地点位置図 (1/2,500)

Ⅱ. 位置と環境

筑後市は福岡県の南西部、筑後平野の中央部にあたる。市域をJR鹿児島本線と国道209号線が縦断し、国道442号線が横断する。また、市南西部には一級河川の矢部川、中央部には山ノ井川や花宗川、北部には倉目川が西流する。市北部には耳納山地から派生する八女丘陵が西に延び、灌漑用の溜池が点在する。低位扇状地である東部や、低地である南西部には農業水路が発達している。当市は県内有数の農業地帯であり、北部の丘陵地域では果樹園や茶畑、東部や南西部では米麦中心の田園地帯が広がる。市街地は、国道に沿って市の中央部に形成されている。

筑後市の歴史は旧石器時代まで遡ることができ、市内北部の蔵数坂口遺跡や久恵地区北側の鶴田東大坪遺跡で遺物が出土している。つづく縄文時代は、市内南部で多くの遺跡が確認されている。特に鶴田岸添遺跡・久恵内次郎遺跡では早期の落とし穴が検出され、津島九反坪遺跡・志前田遺跡・鶴田岸添遺跡・久恵中野遺跡では早期と思われる石組炉を検出している。

弥生時代の遺跡も市内南部で多く確認されている。前期から中期の遺跡としては常用長田遺跡・津島九反坪遺跡・上北島塚ノ本遺跡などがあり多くの遺物・遺構が出土している。特に上北島塚ノ本遺跡では夜臼式土器が出土しており注目されている。中期以降では蔵数森ノ木遺跡・津島皿ヶ町遺跡・鶴田岸添遺跡などがある。

古墳時代の遺跡としては、市内北部の石人山・欠塚・瑞王寺などの古墳が有名である。また、弥生時代から継続して生活が営まれていた遺跡として蔵数森ノ木遺跡・久富鳥居遺跡・鶴田西畑遺跡・津島南佛生遺跡などがある。

古代では、平安時代の法典『延喜式』にみられる「葛野駅」が筑後市内にあったと考えられており、市内中心部の羽犬塚中学校附近が有力地である。当時の官道である西海道の要衝として認知される。古代の遺跡としては墨書土器が多く出土した羽犬塚中道遺跡、竪穴式住居で構成された大規模集落跡の若菜森坊遺跡がある。また、鶴田中市ノ塚遺跡・山ノ井川口遺跡・羽犬塚山ノ前遺跡などがある。

中世には大宰府安楽寺領など社寺の荘園として発展し、その支配を基盤として当地域社会が形成されている。

<参考文献>

- ・亀崎卓爾「第一編 自然」『筑後市史』第一巻 1997年 筑後市
- ・柴田剛編『筑後東部遺跡群Ⅶ』2002年 筑後市教育委員会

Ⅲ. 調査成果

1. 鶴田武津恵遺跡

(1) はじめに

A区～G区の7地点に区分して調査した。このうち、用地内の県道八女・瀬高線に沿うように設置されたトレンチは、現況道路や水路との関係から東よりA区～E区の5地点、残るF・G区の2地点は鶴田櫛原遺跡第2次調査地点のすぐ北側にあたる場所で、やや広めに調査区を設定することができた。以下、各地区にわけて説明する。

(2) 検出遺構

A区 (Fig.4, Pla.1)

溝

SD009 検出上面での東西幅10.4～13.5mを測る南北溝と思われるが、一段下位に幅2.8m、深さ約0.2mの北西から南東方向へ流れる溝が存在する。ただこれが本来の流れの方向とは思えず、溝下位で蛇行するように流れているものと推定され、本体は概ね南北方向を示すと思われる。本体の深さは、西岸の標高が高いため西側では途中の平坦部まで約0.7mを測る。

その他の遺構

SX060 南北1.0m、東西1.0mの隅丸略方形を呈するピットで、深さは約0.2mを測る。

SX065 SX060に切られるピットで、径約0.5m、深さは約0.3mを測る。

B区 (Fig.3・4, Pla.1)

溝

SD001 幅2.0～2.4m、深さ約0.6mを測る溝で、北東から南西に流れるものと思われるが、調査区内に溝の北端がある。溝の断面形状は逆三角形を呈している。埋土は粘質系の土で構成されている。

SD002 SD001の東側に平行するように穿たれる小溝で、幅約0.35m、深さ6～18cm内外と浅い。溝底の標高は北に低く、SD001とは逆になる。

SD007 調査区西端で検出された小溝で、先のSD001・002とその方向は近似する。幅0.4m程度、深さ10cm程度で、溝底の標高は調査区内で凹凸があり、流れの方向を判断できない。

その他の遺構

SX008 調査内に収まらないためその性格は判断しがたい。調査段階では溝の可能性が考えられたが、北側で細くなり、収束する可能性もある。規模は南端で6.2m、北端で2.7mを測り、北に向かって湾曲する平面を有し、深さは0.55～0.7mで南が深い。

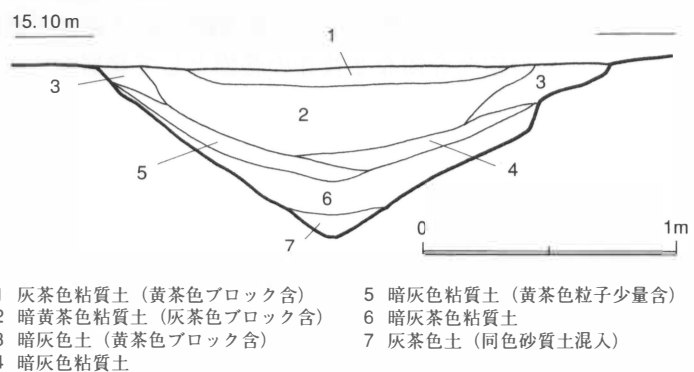


Fig.3 鶴田武津恵遺跡B区SD001土層観察図 (1/30)

C区 (Fig.4・5, Pla.2)

溝

SD003 次に報告するSD005の北岸にあって平行するように穿たれる東西溝である。幅は0.6～1.1m、

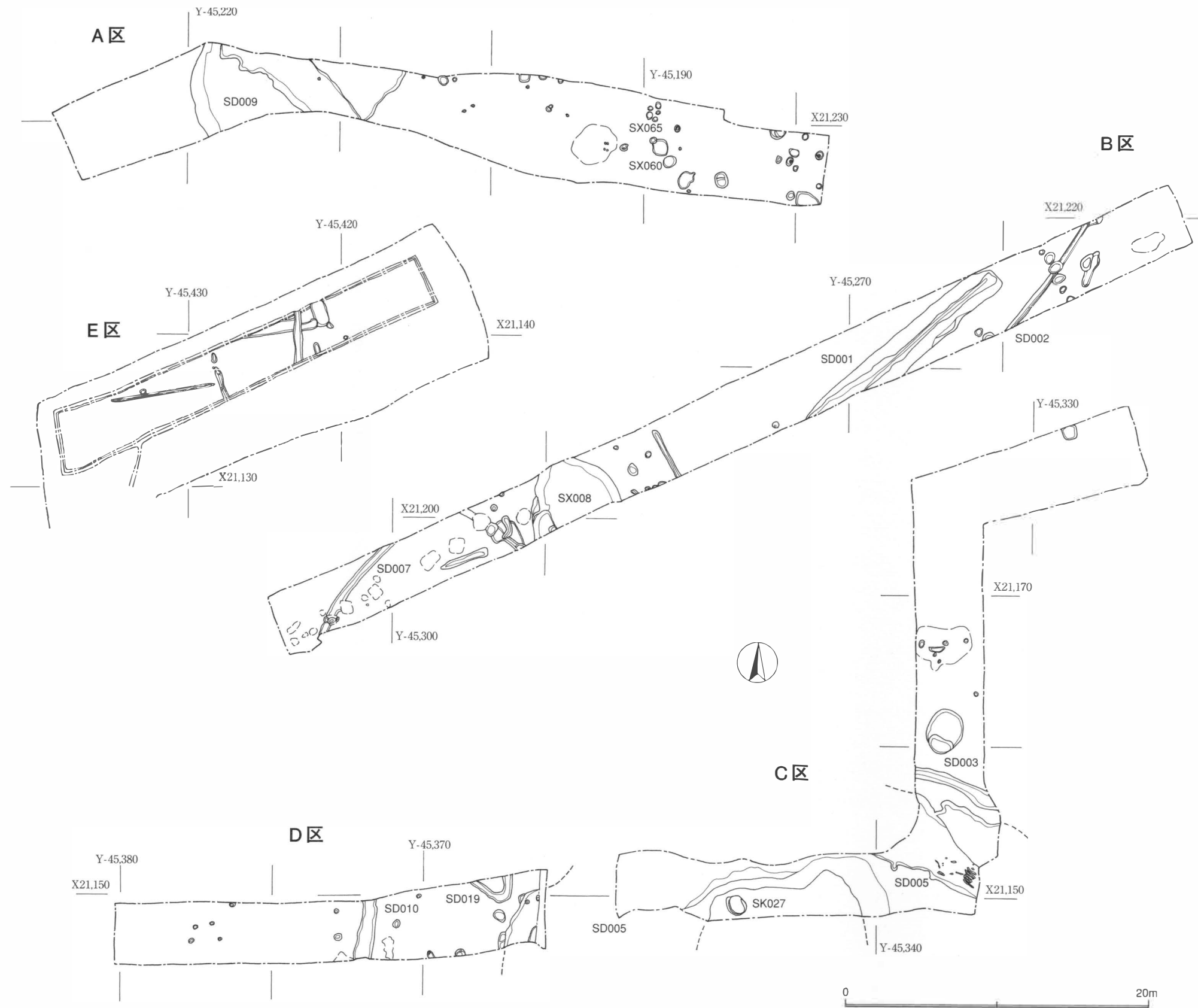


Fig.4 鶴田武津恵遺跡A~E区遺構配置図 (1/300・トレンチ配置図はFig.2参照)

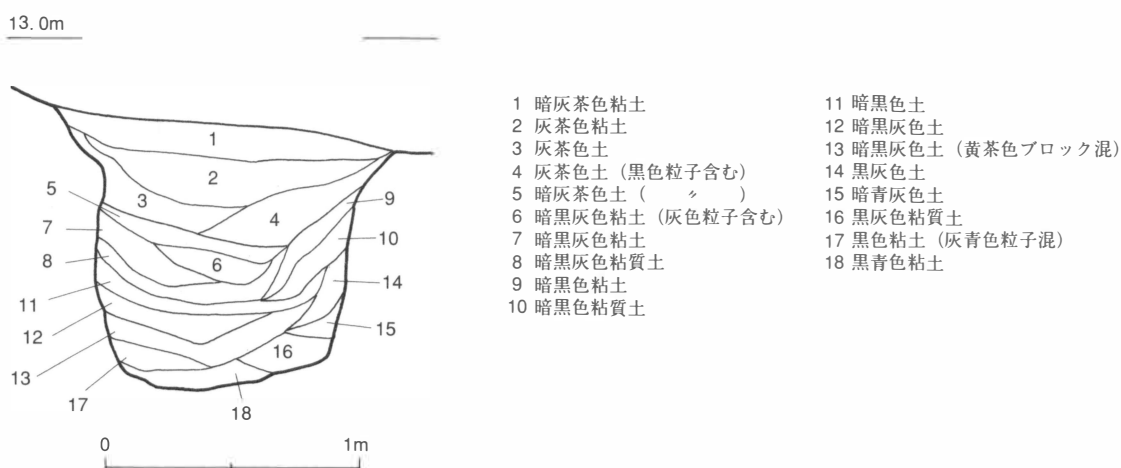


Fig.5 鶴田武津恵遺跡C区SK027土層観察図 (1/30)

深さは0.2~0.3m程度で、溝底には起伏があり検出長も5.5mと短いことから、流れの方向は判断できない。

SD005 調査区の南端で検出された大溝で、トレンチの制約から全貌を把握することは叶わなかった。検出の範囲で得た情報を示すと、溝は大きくうねるものの概ね東西方向を示し、トレンチの西端では大きく南へ湾曲するようである。D区トレンチの東端に検出された落ち込みは、この溝の西肩部分に相当すると考えられる。溝幅はC区トレンチの屈曲部付近で7.5~8.0m程度、C・D区にまたがる地点では12m余りの幅とすることができる。深さは東端で1.5m余り、西端では1.0m余りである、また溝はトレンチの東端付近では2段になっており、下位の幅は5.0m内外、深さは0.2~0.3m程度である。なお溝東端の底部付近に杭や棒材で構成される施設を見出した。堰状遺構の可能性を考えて細部の観察を行ったが、すでに崩壊しており当初の形状を把握するまでには至らなかった (Pla.2)。なお、検出の範囲が狭いことから流れの方向を特定することは難しい。

土坑

SK027 長さ1.4m、幅1.0m、深さ約1.1mの長円形土坑である。埋土の様相から長い時間をかけて埋没したようで、土坑開削後、埋めることなく機能させる必要がある性格を想定する必要があるだろう。調査段階では落とし穴の可能性を考えたが、貯蔵穴のような性格もそれに加えることができるであろう。

D区 (Fig.6, Pla.2)

溝

SD005 C区で検出した溝の西肩部分である。詳細はC区で解説したので参照されたい。

SD010 調査区の中央付近を南北方向に貫通する溝で、検出長4.0m、幅0.8~1.2m、深さ0.2~0.3mを測る。流れの方向は検出長の短さから判断できない。

SD019 調査区東端付近で鍵状に折れる小溝で、幅0.4~0.5m、深さ0.15~0.2mを測る。

E区 (Fig.6, Pla.3)

幅0.2~0.5m程度の南北方向に走る小溝が検出されているが、特筆すべきものはない。また遺物も出土していない。

F区 (Fig.6・7, Pla.3・4)

次のG区とともにややまとまった面積を調査できた。

土坑

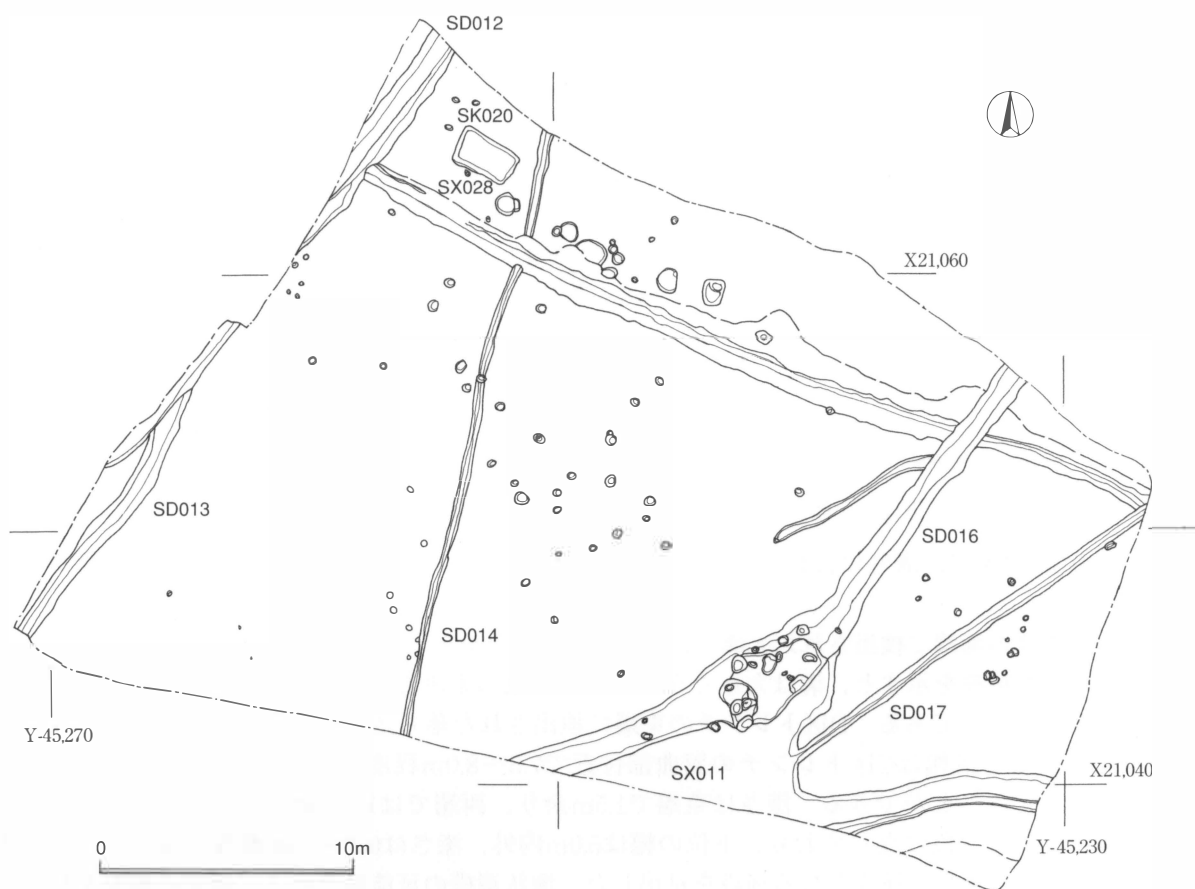


Fig.6 鶴田武津恵遺跡F区遺構配置図 (1/300)

SK020 長さ2.5m、幅1.5m、深さ約0.4mで、隅丸長方形を呈する。

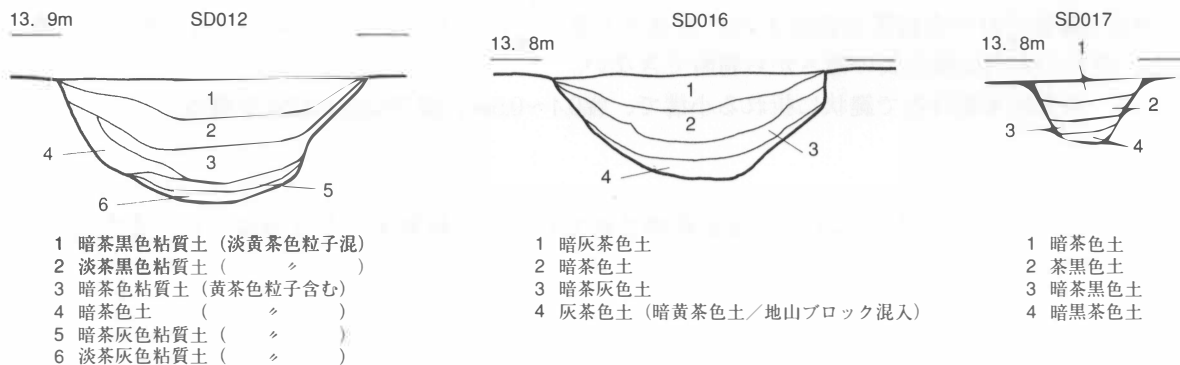
溝

SD012 調査区の西端を略南北方向に穿たれる溝で、検出長10.0m、幅1.2m、深さ約0.5mを測る。SD013より新しい。

SD013 SD012にその北端を切られる。検出長12.0m、幅0.7~1.0m、深さ約0.2mを測る。

SD014 調査区をほぼ南北に貫通するかたちで検出された溝で、検出長24.5m、幅0.3~0.4m、深さ約0.15mを測る。溝底はわずかがだが南に低い。

SD016 調査区をほぼ南北に貫通するが中程でわずかに屈曲する形で検出された溝で、検出長25.0m、



- 1 暗茶黒色粘質土 (淡黄茶色粒子混)
- 2 淡茶黒色粘質土 (/)
- 3 暗茶色粘質土 (黄茶色粒子含む)
- 4 暗茶色土 (/)
- 5 暗茶灰色粘質土 (/)
- 6 淡茶灰色粘質土 (/)

- 1 暗灰茶色土
- 2 暗茶色土
- 3 暗茶灰色土
- 4 灰茶色土 (暗黄茶色土 / 地山ブロック混入)

- 1 暗茶色土
- 2 茶黒色土
- 3 暗茶黒色土
- 4 暗黒茶色土

Fig.7 鶴田武津恵遺跡F区検出溝土層観察図 (1/30)



Fig.8 鶴田武津恵遺跡G区遺構配置図 (1/300)

幅1.2m、SX011と接する付近ではやや広がって幅3.1m程度を測る。この部分の底は凹凸が著しい。深さは北側で残存状況がよく約0.4m程度であるが、南側では0.15m程度と浅くなっている。溝底はわずかだが北に低い。

SD017 SX011に流れ込むような状況を呈しているが、検出段階ではその前後関係を明確に把握することはできなかった。溝は検出長17.3m、幅0.3~0.5m、深さ0.15~0.3mを測るが、流れの方向は定かでない。

その他の遺構

SX011 調査区東南隅部分に検出された溜まり状の遺構で、その北岸をSD016が流れ、東北辺にSD017がつながっている。SD016とは最終埋没の段階で本遺構が最後に埋まっているが、そのあり方から推定すると同時に存在していた可能性も残されている。検出規模は南北約10m、東西29mでさらに大きく広がっていることは明らかである。また東側では溝状を呈する部位もあり、いくつかの溝が重なり合って形成された可能性も考えられよう。

SX028 SK020に南東部にあるピットで、0.9×0.75mの不整形円形で、深さは0.1mと浅い。

G区 (Fig.8・9、Pla.3・4)

掘立柱建物

SB092 東西2間 (3.7m)、南北1間 (2.3m) の建物と推定されるが、南辺の中央の柱が見つからない。さらに南へ延びる可能性は低いため、囲いの施設の可能性もあろう。

この他、調査区東南端付近にもピットの並ぶ箇所があるが、建物として把握するのは難しい。

溝

SD021 SD022に接する付近で南へ鍵形に折れ曲がり、SD022に重なっている。検出長15m、深さ約0.1mを測る。検出時はこの遺構が新しいと判断しているが、開削段階では同時存在の可能性も否定できない。

SD022 調査区北辺で攪乱によって一部を破壊されているが、SD021と同様に鍵形に折れ曲がる溝である。両者はおそらく同時併存し、同様の機能を果たしていたものと思われる。

SD023 調査東端を南北に貫通する形で検出されたもので、検出長22.8m、幅0.7m内外、深さ0.2~0.25m程度を測る。溝の底は南側が低い。東側にほぼ平行して流れるSD024より新しい。

SD024 SD023にほぼ平行して流れる溝で、検出長19.5m、幅0.3~0.4m、深さ0.15~0.2mを測る。調査区の範囲の情報では、流れの方向は判断できない。

SD025 SD021の南側で鍵形にまがるもので、検出総長12m、幅0.5~1.0m、深さ0.1m以内の浅いものである。

SD026 調査区西端で検出された湾曲する小溝で、検出総長5.5m、幅0.3~0.4m、深さ0.15~0.2mを測る。

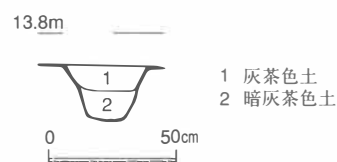


Fig9 鶴田武津恵遺跡G区SD024
土層観察図 (1/30)

(3) 出土遺物

A区

SX060出土遺物 (Fig.10、Pla.5)

弥生土器

甕 (1) 底径5.8cmで、底部外面は中央に少し窪む。底部内面は強いナデで仕上げられ、上位の調整との境目には明瞭な段を形成し、底部が一際窪むように作られている。他の部位は風化が著しく、調整の観察は不能である。

SX065出土遺物 (Fig.10、Pla.5)

弥生土器

壺 (2・3) 2は口径22.6cmに復元できるもので、口縁上位を大きく外側に反らせる。頸部以上の高さは5.5cm程度で、肩部(体部)上に口縁部を乗せて接合している。3は底径6.3cmで、底部外面中央部をわずかに窪ませる。体部は外方に大きく開くものだが、内外面ともに風化が進行し、調整の観察は

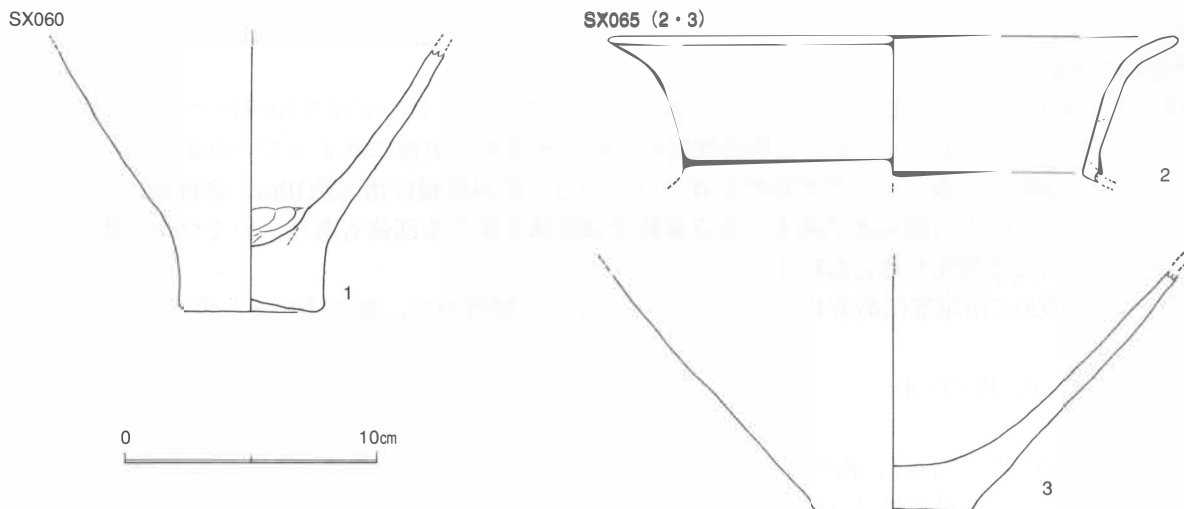


Fig.10 鶴田武津恵遺跡A区出土遺物実測図 (1/3)

不能である。

B区

SD001出土遺物 (Fig.11、Pla.5)

土師器

小皿b (1) 口径6.2cm、器高1.7cm、底径3.9cm。底部は糸切りされる。

SX008出土遺物 (Fig.11、Pla.5)

土製品

錘 (2・3) 2は長さ3.4cm、最大径1.4cmで、径0.3cmで貫通する穿孔がある。3は長さ4.1cm、最大径1.1cmで、径0.3cmで貫通する穿孔がある。いずれも表面は風化が進むが、ユビオサエによって整形されたことがわかる。

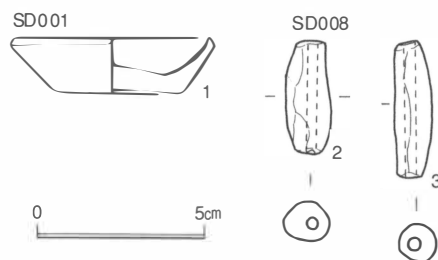


Fig11 鶴田武津恵遺跡B区出土遺物実測図 (1/3)

C区

溝

SD003出土遺物 (Fig.12、Pla.6)

石器

石包丁 (10) 外湾刃半月形の磨製石包丁で、片岩製。刃部は明瞭に作り出されていない。未貫通の穿孔痕が紐孔の真下に確認できる。欠損しており、最大長5.6cm、最大幅4.5cm、最大厚0.6cm、重量21.7gを測る。下層出土。

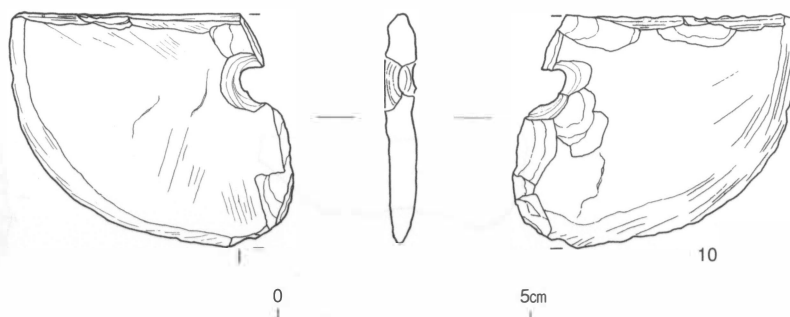


Fig12 鶴田武津恵遺跡C区出土石器実測図 (2/3)

D区・E区

顕著な出土遺物はない。

F区

SD012出土遺物 (Fig.13・14、Pla.6・7)

須恵器

鉢 (2) 外面及び内面の上位はヨコナデ、体部の内面はナデである。口縁部端部外面のみ暗灰色を呈し、他は淡灰色。東播系。

石器

石核 (7) 自然礫を素材とし、折損面を打面に剥片を剥離している。最大長10.9cm、最大幅5.3cm、最大厚2.4cm、重量102.3g、頁岩製。

SD016出土遺物 (Fig.13、Pla.6・7)

須恵器

鉢 (3・4) 3は還元不良で明灰茶色を

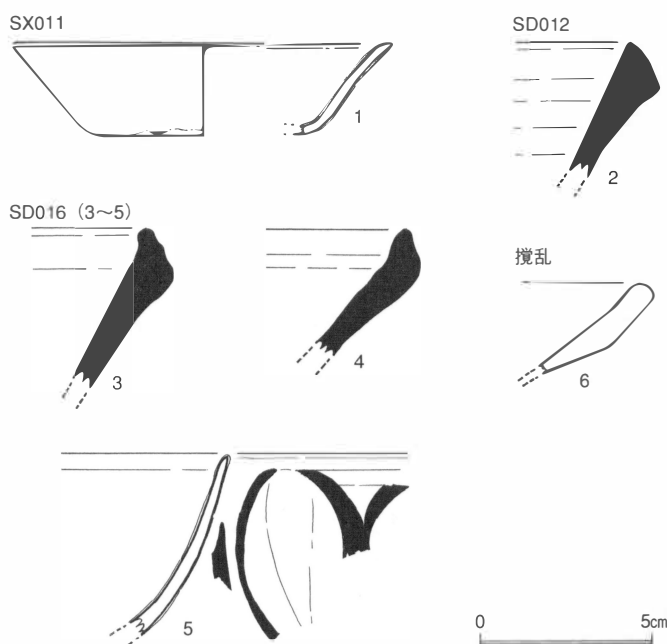


Fig13 鶴田武津恵遺跡F区出土遺物実測図 (1/3)

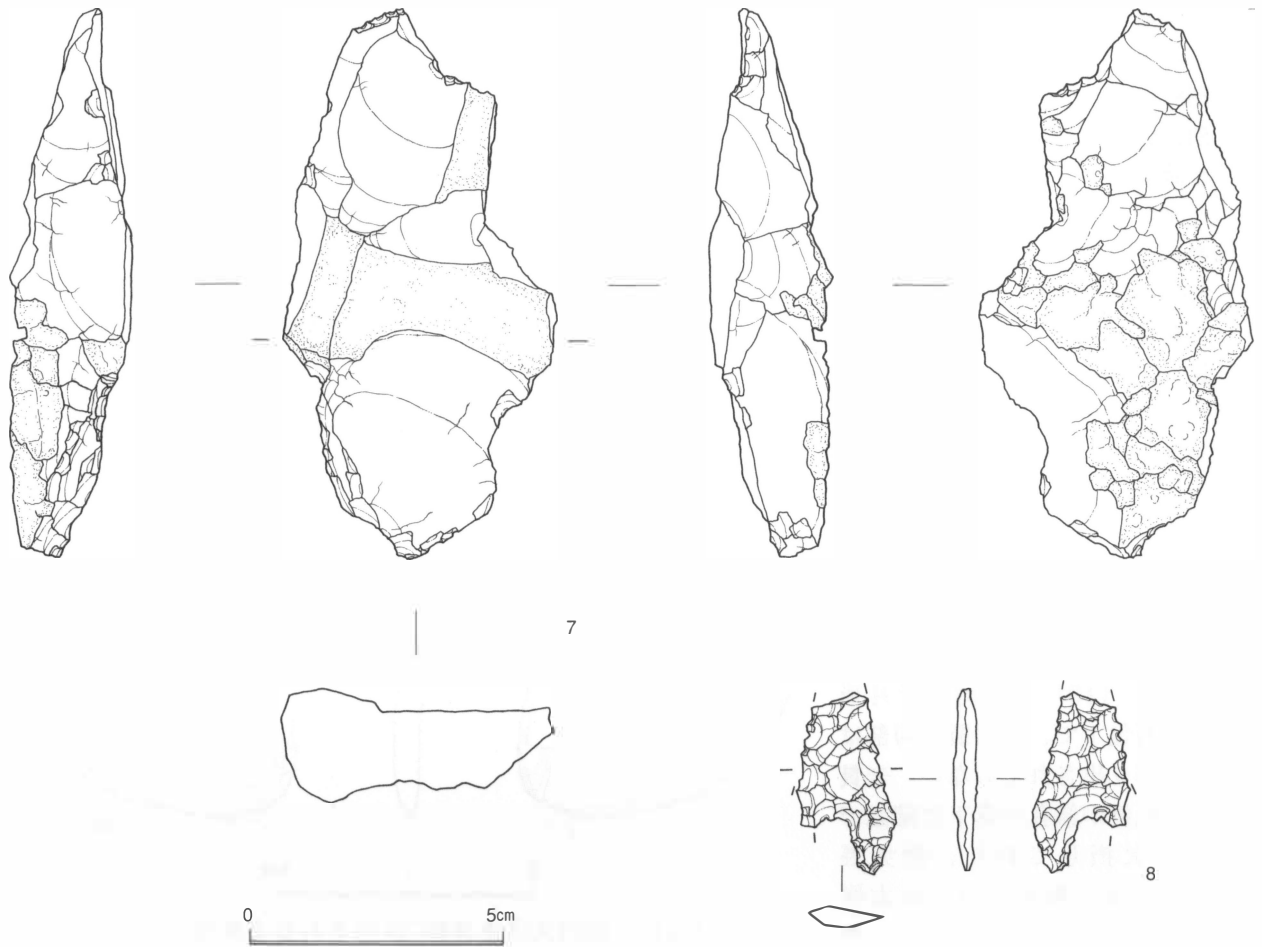


Fig14. 鶴田武津恵遺跡F区出土石器実測図 (2/3)

呈し、軟質で、形態は口縁端部を小さくつまみ上げるものである。外面は指圧痕様のものが観察でき、その後にヨコナデとみられ、内面は口縁部付近がヨコナデ、体部はナデである。4は還元良好で淡灰色を呈し、硬質で、口縁端部外面のみ暗灰色を呈する。3と同様に口縁端部を小さくつまみ上げる。

龍泉窯系青磁

碗 (5) 外面に鑄蓮弁を配するもので、II-b類。淡緑色に発色する釉はやや厚めに掛かり、光沢がある。貫入はほとんどみられない。

SX011出土遺物 (Fig.13、Pla.6)

白磁

皿 (1) 口径11.6cm、器高2.8cm、底径6.6cmを測る。口縁端部の釉を拭き取り、口禿にする。体部は全面に施釉されるが、底部は軽く拭き取っているようである。釉はやや厚めで淡灰白色に発色し、光沢がある。貫入は観察できない。IX-1類。

SX028出土遺物 (Fig.14、Pla.8)

石器

石鏃 (8) 凹基無茎式の石鏃である。全面に丁寧な押圧剥離が施されており、先端部の側辺を3~4mm間隔の鋸歯状に調整し、脚部は長く作り出されている。切先と逆刺を折損するが、切先の折損面には再調整がみられる。風化が著しい。最大長3.6cm、最大幅1.9cm、最大厚0.5cm、重量2.3g測る。黒曜石製。

攪乱出土遺物 (Fig.13、Pla.7)

土師器

鍋 (6) 口縁部の破片で、かなり大きな口径になると予想される。胎土中には多量の小砂粒を含んでおり、かなり粗いものである。また体部はわずかに残存する部分から推定するときわめて薄く作られていたようである。

G区

SD022出土遺物

(Fig.15・16, Pla.8・9)

土師器

杯 a (1) 口径12.5cm、器高3.1cm、底径9.6cmを測る。表面は風化が著しく、調整は明らかでない。底部も風化するが糸切りと思われる。

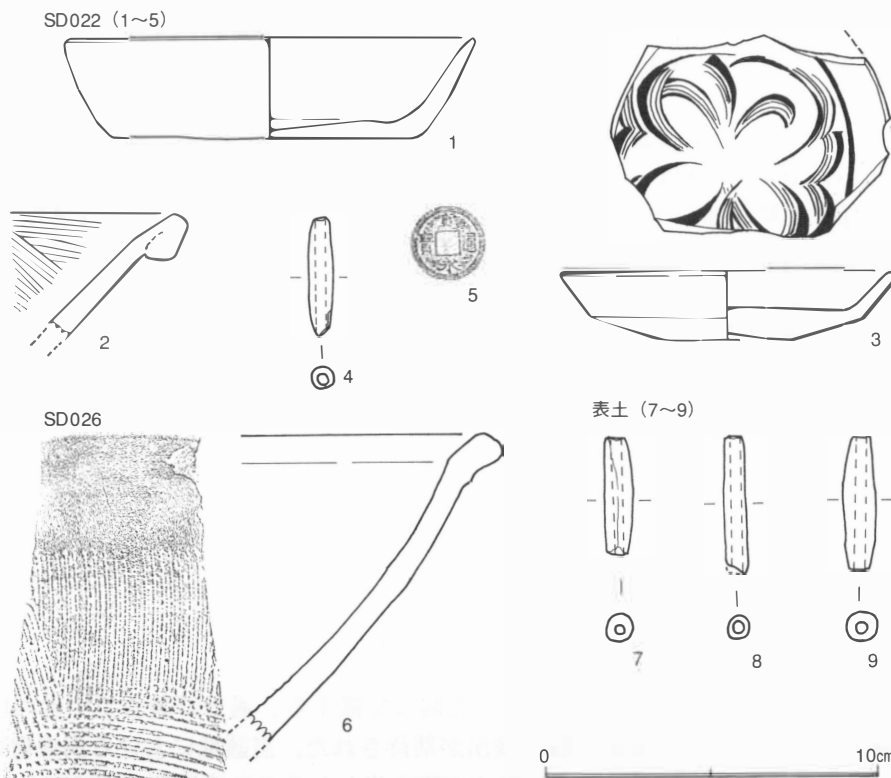


Fig15 鶴田武津恵遺跡G区出土遺物実測図 (1/3)

鍋 (2) 口縁端部をやや角のある玉縁状に作る。表面は風化するが、内面には横及び斜め方向の櫛目が残っている。焼成は甘く、軟質である。

龍泉窯系青磁

皿 (3) 口径10.2cm、器高2.1cm、底径3.9cm。見込みに片切彫りによる花文が施される。釉は底部外面を拭き取るほかは全面に施され、淡緑色に発色して光沢がある。貫入はみられない。底部で釉を拭き取る部分は使用による摩耗が進んでいる。

土製品

錘 (4) 長さ3.4cm、最大径0.7cmで、径0.3cmの貫通する穿孔がある。外面は風化が進行している。

金属製品

銭 (5) 寛永通宝で、径2.25cm、中央の穿孔部は0.6~0.7cmである。背面は無文。

石器

石鎌 (10) 凹基無茎式の石鎌である。腹面側に素材面を残す。切先と逆刺を欠損する。側縁部を2~3mm間隔の鋸歯状に調整する。最大長2.3cm、最大幅1.7cm、最大厚0.4cm、重量0.8g、黒曜石製。

SD026出土遺物 (Fig.15, Pla.9)

陶器

播り鉢 (6) 残存部全面に暗茶色に発色する釉を厚めに施す。釉は鈍い光沢がある。外面は体部中程以下が回転ヘラケズリと見られ、他はヨコナデである。内面は口縁部下位以下に深い櫛目がみられる。櫛目は

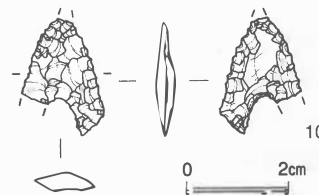


Fig16 鶴田武津恵遺跡G区出土石器実測図 (2/3)

体部下位に至るほど使用による摩滅が進んでいる。

表土出土遺物 (Fig.15、Pla.9)

土製品

錘 (7~9) 7は、長さ3.6cm、最大径0.9cmで、径0.3cmの貫通する穿孔がある。図下方の端部の一部を欠損する。8は、長さ4.1cm、最大径0.7cmで、径0.3cmの貫通する穿孔がある。図下方の端部の一部を欠損する。9は、長さ4.0cm、最大径1.0cmで、径0.3cmの貫通する穿孔がある。両端部の一部を欠損する。いずれの資料も表面の風化が進んでいて調整の観察は難しい。

(4) 小 結

変則的なトレンチの設定を余儀なくされたため、興味ある遺構は存在するもののいずれも全貌や詳細を知り得るには至っていない。当該遺跡の評価は、第IV章のなかで触れることとしたい。

2. 鶴田檜原遺跡 - 第2次調査 -

(1) はじめに

調査地は同遺跡第1次調査地のすぐ北側に位置する。過去の調査で中世の区画溝、掘立柱建物などが調査されており、その関連遺構の検出が期待された。当該地における調査前の現状は水田で、表土と床土を除去するとすぐに淡茶色土の地山が顔を出し、そこに遺構面が形成されている状態であった。

(2) 検出遺構

掘立柱建物

2SB055 (Fig.17・18、Pla.10~12) 東西2間 (3.5m)、南北3間 (6.0m) で、西辺にやや不揃いのところがある以外は、各辺はほぼ等間に割り付けられる。建物の主軸はN-4° 20' -E。柱穴はその多くが南北に長くなる楕円形で、0.5~0.7m×0.3~0.4mを測る。深さは0.15~0.6mとかなり不揃いである。埋土は土層図に示すとおりだが、柱痕跡の確認は難しく、aやgの土層では裏込土とみられる土層の存在があるものの柱が不明確であることから、抜き取られた可能性も考えておきたい。

また建物の東側には同一方向の溝2SD051があり、建物との関係を窺わせる。さらに建物の南側と西側の一部に数cm程度の段差があり、これもこの建物に関連するものと思われるが、何を意味するものかは判断できない。

2SB085 東西2間 (5.2m)、南北2間 (3.8m) ながら東西方向に長い建物である。柱穴は略円形で、径0.2~0.3m、深さ0.1~0.25mを測る。主軸はわずかに北で西に振っている。

2SB090 柱穴は各辺不揃いだが東西2間 (2.7m)、南北2間 (2.4m) で南側に1間 (0.3m) の小さな廂または縁側が附属する建物と判断した。柱穴は0.1m強と小さく、深さも0.1m程度である。主軸はわずかに北で西に振っている。建物の中央にも柱があるとみられ、北東側にも間仕切りのようなものが存在したと思われる。一案として提示しておく。

2SB093 東西2間 (4.1m)、南北1間 (1.4m) 以上と推定される。主軸はわずかに北で西に振っている。柱穴は0.2~0.3m程度の略円形で、深さは0.15~0.2m程度である。第1次調査段階では認識していなかったが、1SB100の西側に確認される柱列がこの建物の南辺である可能性も考えられる。

2SB094 周溝墓に重複する建物だが、溝の埋土を柱掘方が切っているためこの建物が新しい。東西2間 (3.0m)、南北2間 (4.4m) ながら南北に長い建物である。柱穴は略円形で0.15~0.2m、深さは0.1~0.15mを測る。2SD100以東のブロックでは、わずかだが唯一東に振っている建物である。

2SB095 東西2間 (3.5m)、南北2間 (3.5m) でほぼ正方形を呈し、中央にも柱穴が確認できる総柱

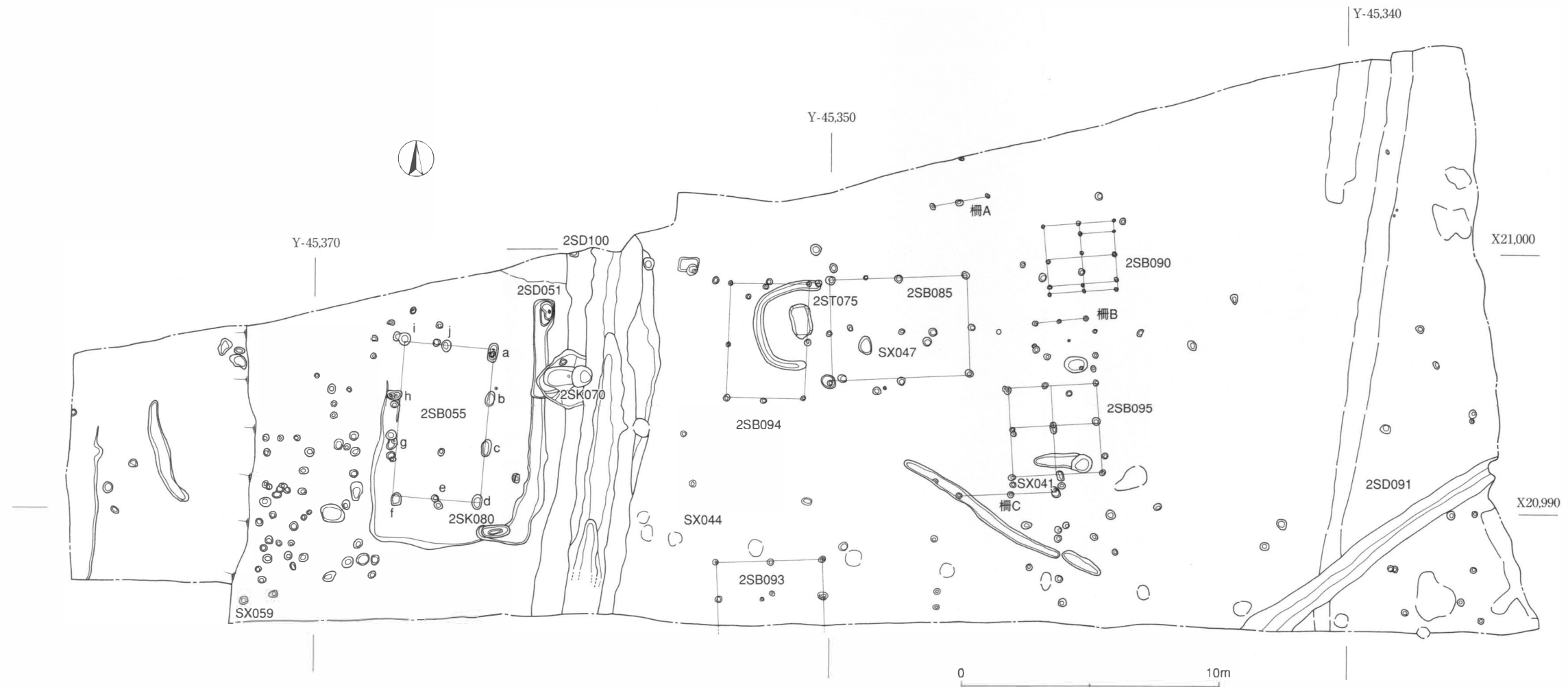


Fig.17 鶴田榑原遺跡第2次調査遺構配置図 (1/200)

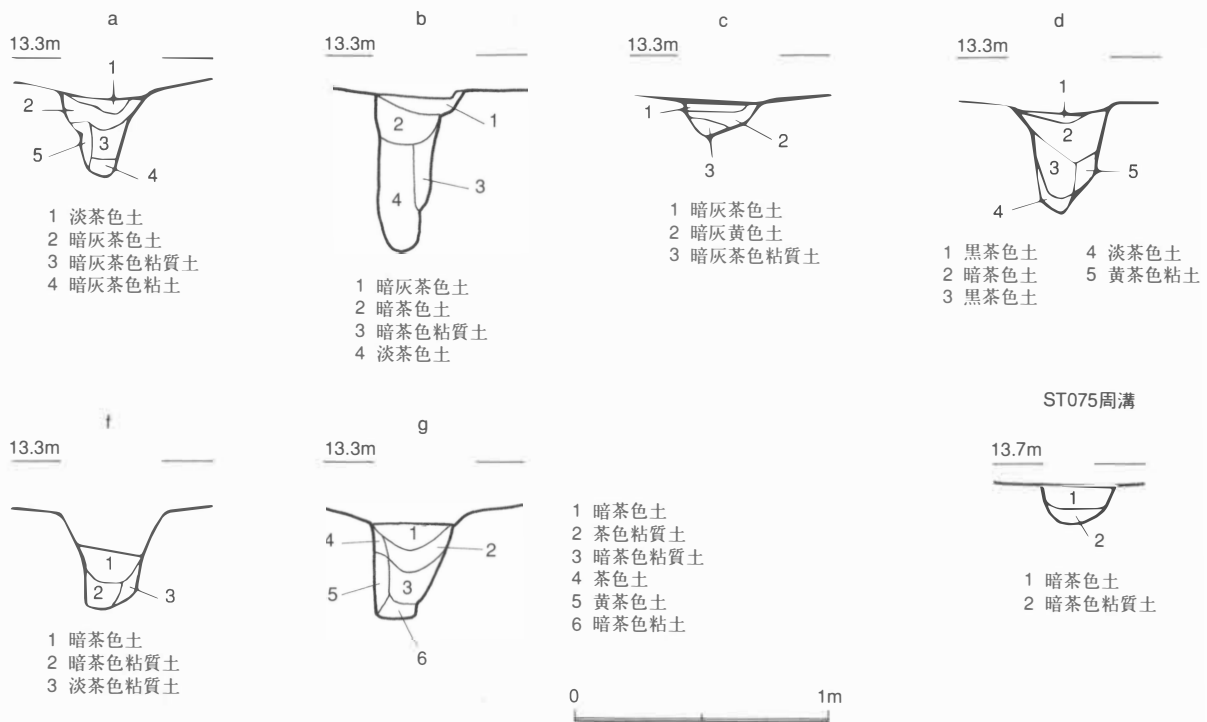


Fig.18 鶴田柗原遺跡2SB055柱穴・2ST075周溝土層観察図 (1/30)

形式の建物である。柱穴は0.15~0.3mの略円形で、深さは0.1~0.2m程度である。

建物としてまとまらないが、2間程度の柵状遺構がいくつかあり、仮に柵A・B・Cとして図中に表示した。

溝

2SD051 2SB055の東側1.5~1.8mの位置で南北方向に存在するもので、長さ9.5m、幅は0.5~1.0m、深さは数cm程度と浅い。溝は南端で西へ折れ曲がっているが、その部分に2SK080が切り込み、溝の端部は不明である。ただ溝の南辺は軽い段差となってそのまま4.5mほど西へ延び、2SB055の南西で北へ折れ、さらに6.0mほど北側へ延びて終わる。

2SD091 調査区の南東隅部に位置するもので、長さ11.5m分を検出した。幅はほぼ1.0mで、深さは0.3~0.4mを測る。埋土は大きく2層に分かれ、下位が暗茶色粘質土、上位が黒茶色粘質土である。溝底の標高から南側へ流れていたようであるが、その差は小さい。溝の主軸はN-55° 10' -Eと大きく振れている。溝の規模、位置、方向性等から第1次調査で検出した1SD020の延長部分とみられる。

2SD100 溝幅3.0~3.5m、深さ約1.0mで、溝底の標高は南端で12.58m前後、北端で12.32m前後、途中に凹凸があるもののほぼ南から北へ向かって流れている。この溝の最終埋没はかなり新しく昭和の範疇におさまると思われる。第1次調査区ではこの溝の直上が道となっていてわずかに一部分が確認されただけだが、それ以前は溝として機能していたものと推察する。ただし開削は古いと考えているが、遺物がほとんどなく時期の確定は難しい。しかし、溝の方向は掘立柱建物2SB055やそれに付帯するとみられる2SD051とほぼ同じ方向を向いており、それらに近い時期に開削を求めたい。

土坑

2SK070 2SD100に近接する土坑で、切り合い関係は明確ではない。ただし最終埋没は溝が新しい。土坑は1.9×1.0m、深さ6cm程度である。

2SK080 2SD051の一部を切る形で検出された土坑で、1.1×0.5m、深さ約0.15mで、底の一部が数cmほど小溝状に窪んでいる。埋土は黒茶色粘質土が上層、暗茶色粘質土が下層となり、盆状に堆積し

ている。

周溝墓

2ST075 (Fig. 18・19、Pla.10～12) 出土遺物には恵まれないが、中央に土坑(主体部)を有し、その周囲に溝を巡らす墳墓と認識できる遺構である。まず土坑は、南北1.33m、東西0.77m、深さ0.40～0.43mを測り、平面形状は隅丸長方形を呈している。埋土は土層図に示すとおり盆状の堆積を示す程度であり、木棺の

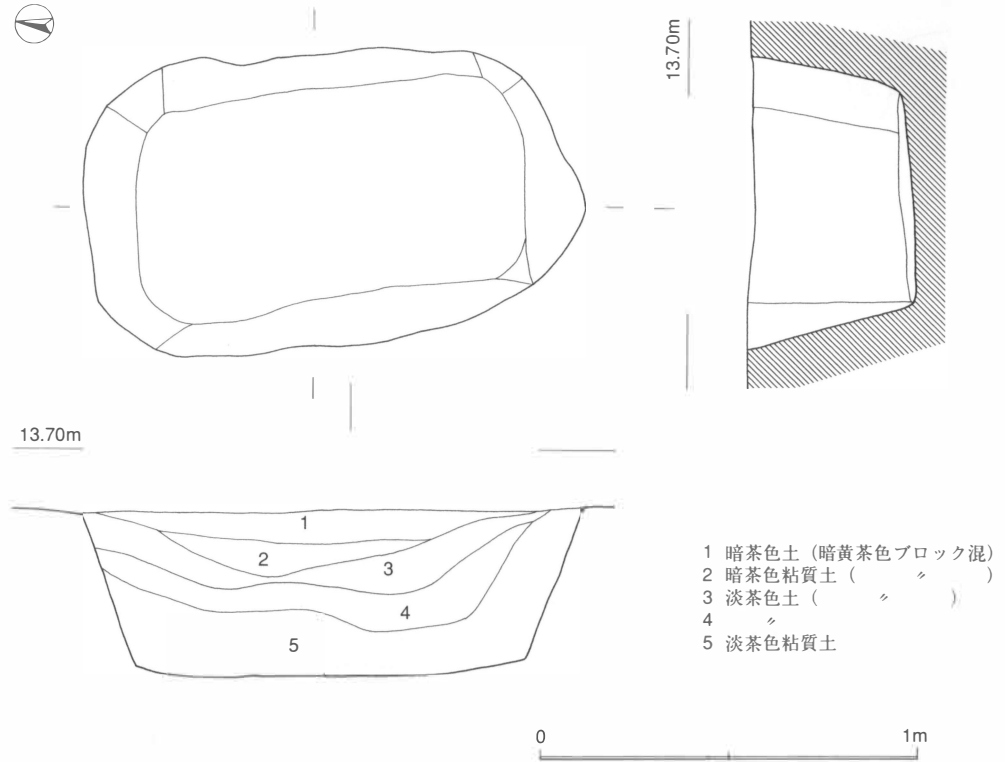


Fig.19 鶴田柵原遺跡2ST075主体部実測図及び土層観察図(1/40)

痕跡等は見出せない。周溝は東側には存在せず、ほぼ半円形を呈している。その南北距離は3.5m(溝の外側間距離)、東西は2.7m程度である。溝の幅は0.3～0.4m、深さは0.15m内外という小規模なもので、埋土は暗茶色土の単一層ながら上位ではやや締まりがあり、下位では粘性が強い。

その他の遺構

2SX041 柵Cの東端にあるピットを切る小ピットで、径約0.2m、約0.15mを測る。

2SX044 2SB093の北西にあるピットだが、攪乱の一部と見なされる。

2SX047 2SB085の中に位置するピットで、南北0.6m、東西0.45m、深さ5cm程度を測る。建物との関係は不明である。

2SX059 西端にある新しい段落ちの際にあるピットで、径約0.3m、深さ0.15mを測る。

(3) 出土遺物

2SK070出土遺物 (Fig.20、Pla.13)

石製品

砥石 (1) 片方の端部を失っているが、全長10.7cm、最大幅4.9cm、厚さ4.9cmを測る。4面とも擦痕が残っており使用面であることがわかる。また図の下面にあたる部位は切断した折りの調整痕がみられるが、砥石としての使用面ではなく、風化が進行して暗灰色を呈している。砂岩製とみられる。

2SK080出土遺物 (Fig.20、Pla.13)

石製品

鍋 (2) 滑石製の鍋で、断面台形状の鍔がつく。外面はケズリ調整、内面もケズリによるが丁寧に研磨されている。

2SX041出土遺物 (Fig.20、Pla.13)

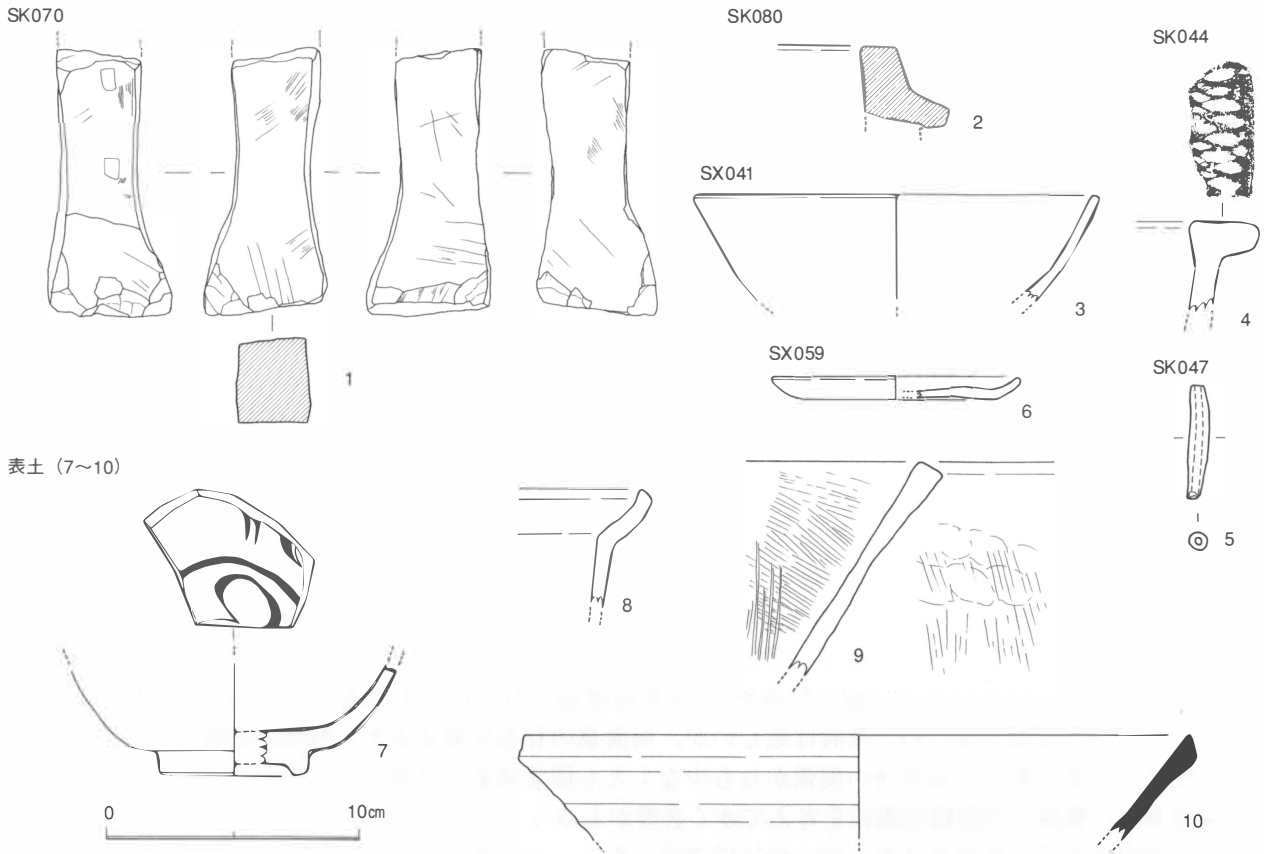


Fig.20 鶴田柗原遺跡第2次出土遺物実測図 (1/3)

瓦器

椀 (3) 口径16.4cmで底部を失う。風化が進行し外面の調整は観察できないが、内面にはわずかながら横方向のヘラミガキが観察できる。

2SX044出土遺物 (Fig.20、Pla.13)

土師器

鍋 (4) 口縁部片で、端部を外側へ大きく張り出し、その上面を平坦にして0.5~1.0cm程度で米粒型の押圧痕が連続してみられる。他はヨコナデ調整される。

2SX047出土遺物 (Fig.20、Pla.14)

土製品

錘 (5) 長さ3.0cm、最大径0.5cmを測り、中央に径0.2cmの貫通する穴がある。表面は指圧によって仕上げられる。

2SK059出土遺物 (Fig.20、Pla.15)

土師器

小皿a (6) 口径10.0cm、器高0.9cm、底径8.2cm。底部は風化して観察しづらいが、糸切りと思われる。

表土出土遺物 (Fig.20、Pla.14・15)

土師器

鍋 (8) 外方へ広がりながらわずかに内側へ湾曲する口縁部を有し、端部を内側にわずかにつまみ出す。表面は全体に風化し調整等は観察しづらいが、外面の随所に煤の付着がみられる。

須恵器

搦鉢 (9) 焼成があまく軟質で、内外面ともに明灰色を呈し、口縁部付近は還元されず明茶褐色を

呈している。表面は風化も進んでいるが、外面は縦方向のハケ目、内面は斜め方向のハケ目が観察され、内面には5本を1単位とする櫛目（播り目）が施される。

鉢（10） 硬質に焼成され、口縁端部は暗灰色を呈している。東播系とみられる。

龍泉窯系青磁

椀（7） 高台径6.0cm。内面と見込み部分にヘラによる文様が施される。釉は畳付から外底にかけて見られない他は前面に施され、淡緑色に発色する。全体に大きな貫入がみられる。I-4類。

（4）小 結

出土遺物に恵まれないため詳細な年代決定や性格付けは難しいが、得られた情報から考えられる事項を記載してまとめたい。

まず遺構の多くは13世紀代を中心とした時期に形成されたもので、中央にある大溝2SD100を境に東西に分けて考えることができよう。まず西の区画は2SB055としたやや規模の大きな掘立柱建物があり、それには浅い溝が配置され、他の遺構と明確に区分されている。これは同じ西側の区画内でも建物周辺（2SD051以内）とその西側とでは小ピットの存在状況が異なっていることから理解できる。したがって2SB055は、西側区画内における重要な建物のひとつであったと認識できよう。また東側の区画における建物の大半が軸を西に振っているのに対して、この建物はわずかながら東に偏していること、大溝もこれに近いことなども他と異なった位置にあることがわかる。

これに対して東側の区画では掘立柱建物は5棟程度確認されたがいずれも柱穴が小さく、規模も総じて小さい。出土遺物がないので判断は難しいが、周溝墓の存在を考えると、西側の建物とは時期が異なるのではないかと思う。切り合い関係からも少なくとも周溝墓よりは新しい遺構が含まれていることは確実であり、東西での性格の違いを考えてゆく必要がある。

この区画で注目しなければならないのは周溝墓である。この遺構も時期は特定できないが、北部九州にはこれに類する遺構の検出が多い。弥生時代にも類似の遺構が存在するが、古代末期から中世の所産となるものもかなりの数が見つかっている。それらを見ると、最も多いのは佐賀県の佐賀市と大和町、つまり佐賀平野であり、それに続く鳥栖市や基山町にも散見される。さらに福岡県では小郡市を中心に筑後川を遡った地域に若干例がみられる。これらの遺構が示す時期は大きく3つあり、10世紀代を中心とする一群、12世紀後半～14世紀前半頃に主体を置く一群、そして15世紀以降の一群である。もう少し子細にみると12世紀後半～13世紀前半のものと13世紀後半から14世紀前半の一群に細分することも可能である^①。これを踏まえると無遺物の場合かなりの幅を認める必要があるが、今次の調査の大凡の年代が13世紀中頃～14世紀前半であり、上記で細分したグループにはほぼ合致する一群が存在する。このことから、今次の調査で検出した円形周溝遺構は当該期の墳墓と見なしておきたい。

このことを踏まえると、当該調査地の西側区画とこの墳墓には何らかの関係が見出せそうである。つまり屋敷墓としての位置づけである。他地域ながら周溝を有する屋敷墓の事例は、兵庫県宝林寺北遺跡や三重県斎宮遺跡などにあるものの時期的に隔たりが大きい。橋田正徳氏による最近の検討^②では、屋敷墓には何種類かの選地があり、屋敷の区画外におかれる事例（大阪府茨木市総持寺遺跡、同河内長野市大日寺遺跡など）も存在すると指摘する。これらは13世紀頃からみられるようであり、事例では数基が並ぶという違いは見出されるものの、時期的には橋田氏の指摘する傾向に一致する。もちろん即断は避けねばならないが、筑後地域における屋敷と墓の関係を窺わせる興味ある一事例として、検討の必要性を感じる遺構と言える。

なお、第1次調査の結果を踏まえた検討は、「IV. 総括」で行いたい。

① 中世墓資料集成研究会「中世墓資料集成－九州・沖繩編－」2004年 から抽出したデータを基に記載している。

② 橋田正徳「考古学の語る 中世墓地物語」『博物館だよりNo.95』2004年 大谷女子大学博物館

IV. 総括

本書をもって筑後市東部地区ほ場整備事業に関わる発掘調査報告書は最終巻となる。本書を含め9冊に及ぶ報告が刊行され、その一部ではすでに総括的な作業もなされてきた。ここでは重複を恐れず、それらをまとめる意味で簡単ではあるが全地区を見通し、成果の概要を総括するとともに、今後の調査における注意点や着眼点を整理しておきたい。

なお文中の遺跡名の後ろに伏した()内の番号は、Tab.1掲載の遺跡調査番号に一致している。またFig.21~25・27・28の地図上に付した番号も同一である。

旧石器時代 (Fig.21)

今次の筑後東部地区ほ場整備事業に関連する調査(以下、東部地区調査とする)で、鶴田牛ヶ池遺跡第1次(35)で2点、同第4次(34)で3点、鶴田東大坪遺跡第1次(13)で1点、久恵上川原遺跡(38)で1点の3遺跡4地点から計7点の旧石器時代に属する石器が出土した。いずれも安定した状況での出土ではなく、包含する層位あるいは遺構を確認するには至っていない。Ⅷ集(第58集)で指摘した国府型石器の製作地を探索する必要性はもちろんのことだが、これ以後の遺構を形成している基盤土層の詳細な検討を行う必要があるだろう。調査着手前に課題として意識したい問題である。

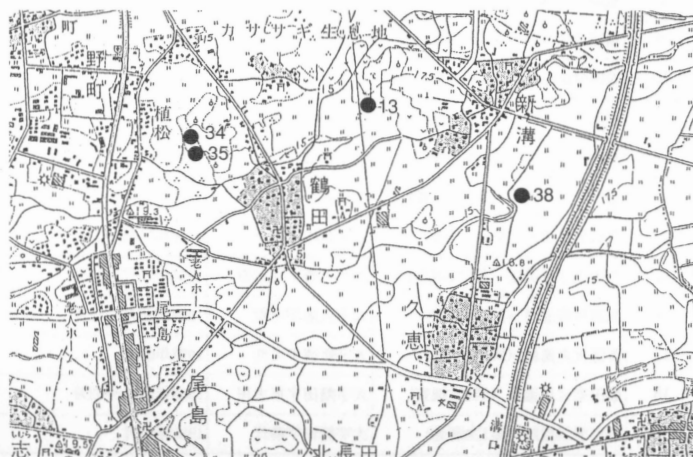


Fig.21 旧石器時代遺物出土地点 (1/30,000)

なお筑後市内では、これらの遺跡を調査する以前の段階で当該期の遺物出土地点は、市北部の蔵数坂口遺跡1件を知るのみであったことを思うと、きわめて重要な所見を得たと言えるだろう。

縄文時代 (Fig.22)

東部地区調査内で出土したこの時期にかかる遺物は、いずれも押型文とされるもので早水台から田村式の段階におさまるものであり、早期後半期と考えて大過ないであろう。出土地点は、新溝丸田遺跡(1)、久恵岸ノ下遺跡第2次(26)、久恵中野遺跡(37)、鶴田東牛ヶ池遺跡第1次(28)、同第2次(29)、鶴田牛ヶ池遺跡第1次(35)、同第3次(33)、同第4次(34)の5遺跡8地点である。いずれも安定した遺構内の出土はなく、攪乱を受けて他の時期の遺構や層位から出土したものが大半を占める。しかし、鶴田地区現集落の西側で植松地区との中間にあたる農地帯と新溝集落の南側の大きく2地区に集中していることに注目する必要があるだろう。

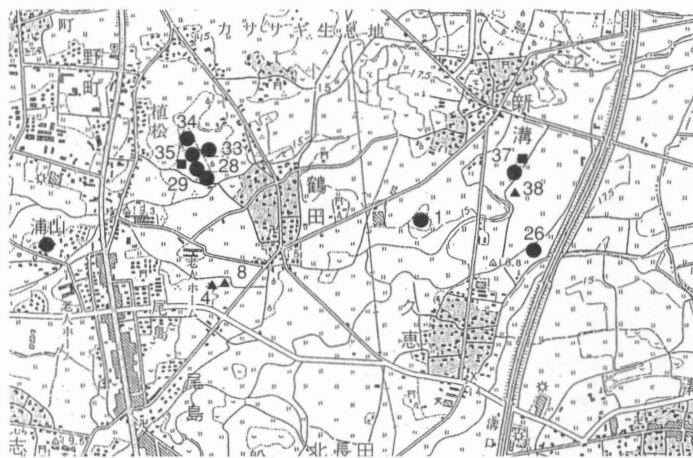


Fig.22 縄文時代遺構・遺物出土地点 (1/30,000)

●押型文土器 ▲落とし穴状遺構 ■石組炉

さらにこの2地区の中にはそれぞれ1地点ずつながら石組炉を検出する地点があった。鶴田牛ヶ池遺跡第1次と久恵中野遺跡である。後者は遺構数は少ないものの残存状況がよく、調査区内では6~15mの間において散在的に分布する。この傾向は個別には残存状況は悪いものの鶴田牛ヶ池遺跡でも同様であり、この遺跡も当該期の遺構群と

Tab.1 県営ほ場整備筑後東部地区関連埋蔵文化財発掘調査一覧表

| 番号 | 遺跡名 | 所在地 | 調査期間 | 遺跡の時代・性格(特記事項) | 報告書(年度) |
|-----|-----------------|-----------|-------------------|--------------------------|-----------|
| 1 | 新溝丸田遺跡(第1次調査) | 大字新溝字丸田 | 1993年06月～10月 | 縄文:(落とし穴)・古墳:集落(竪穴式住居など) | 第11集(H5) |
| 2 | 鶴田前島遺跡(第1次調査) | 大字鶴田字前島 | 1993年10月～11月 | 奈良・中世:集落周辺 | 第11集(H5) |
| 3 | 鶴田橋原遺跡(第1次調査) | 大字鶴田字橋原 | 1993年08月～11月 | 中世:集落周辺 | 第11集(H5) |
| 4 | 鶴田岸添遺跡(第1次調査) | 大字鶴田字岸添 | 1993年04月～09月 | 弥生～古墳・近世:集落(焼失住居など) | 第11集(H5) |
| 5 | 新溝松原遺跡(第1次調査) | 大字新溝字松原 | 1994年10月～1995年03月 | 弥生～古墳:集落 | 第12集(H6) |
| 6・7 | 久恵野元遺跡(第1・2次調査) | 大字久恵字野元 | 1994年09月～1995年03月 | 中世:集落(流路など) | 第12集(H6) |
| 8 | 鶴田岸添遺跡(第2次調査) | 大字鶴田字岸添 | 1994年04月～07月 | 弥生～古墳・近世:集落周辺 | 第12集(H6) |
| 9 | 鶴田岸添遺跡(第3次調査) | 大字鶴田字岸添 | 1994年09月～10月 | 弥生～古墳・近世:集落周辺 | 第12集(H6) |
| 10 | 鶴田岸添遺跡(第4次調査) | 大字鶴田字岸添 | 1994年10月 | 弥生～古墳・近世:集落周辺 | 第12集(H6) |
| 11 | 鶴田西田遺跡(第1次調査) | 大字鶴田字西田 | 1996年07月 | 不明:(溝など) | 第25集(H11) |
| 12 | 鶴田西畑遺跡(第1次調査) | 大字鶴田字西畑 | 1996年09月～12月 | 古墳:集落(竪穴式住居など) | 第25集(H11) |
| 13 | 鶴田東大坪遺跡(第1次調査) | 大字鶴田字東大坪 | 1996年09月～12月 | 縄文～中世:集落(溝、土壌、墳墓など) | 第25集(H11) |
| 14 | 鶴田野田遺跡(第1次調査) | 大字鶴田字野田 | 1996年11月～12月 | 不明:(溝など) | 第25集(H11) |
| 15 | 久恵北水原遺跡(第1次調査) | 大字久恵字北水原 | 1997年10月～12月 | 弥生:(流路) | 第30集(H11) |
| 16 | 久恵今町遺跡(第1次調査) | 大字久恵字今町 | 1997年10月～12月 | 弥生～中世:溝、道路など | 第30集(H11) |
| 17 | 新溝犬丸遺跡(第1次調査) | 大字新溝字犬丸 | 1998年01月 | 近世:(溝など) | 第30集(H11) |
| 18 | 鶴田東大坪遺跡(第2次調査) | 大字鶴田字東大坪 | 1998年01月～02月 | 近世:(溝など) | 第30集(H11) |
| 19 | 鶴田溝代遺跡(第1次調査) | 大字鶴田字溝代 | 1998年02月 | 近世:(溝など) | 第30集(H11) |
| 20 | 久恵北草場遺跡(第1次調査) | 大字久恵字北草場 | 1995年07月～09月 | 弥生～古墳:集落(区画溝など) | 第35集(H12) |
| 21 | 新溝古渡瀬遺跡(第1次調査) | 大字新溝字古渡瀬 | 1995年10月 | 不明:(土坑など) | 第35集(H12) |
| 22 | 久恵内次郎遺跡(第1次調査) | 大字久恵字内次郎 | 1995年07月～09月 | 弥生:集落(掘立柱建物など) | 第35集(H12) |
| 23 | 久恵内次郎遺跡(第2次調査) | 大字久恵字内次郎 | 1996年03月～04月 | 弥生～近世:(流路など) | 第35集(H12) |
| 24 | 久恵川ノ上遺跡(第1次調査) | 大字久恵字川ノ上 | 1996年02月～03月 | 弥生～中世:集落(柵列、流路など) | 第35集(H12) |
| 25 | 久恵岸ノ下遺跡(第1次調査) | 大字久恵字岸ノ下 | 1994年10月～1995年03月 | 縄文・古代・近世:(流路など) | 第35集(H12) |
| 26 | 久恵岸ノ下遺跡(第2次調査) | 大字久恵字岸ノ下 | 1996年01月～03月 | 弥生～中世:(流路など) | 第35集(H12) |
| 27 | 溝口北新替遺跡(第1次調査) | 大字溝口字北新替 | 1997年09月 | 中世:(溝など) | 第36集(H12) |
| 28 | 鶴田東牛ヶ池遺跡(第1次調査) | 大字鶴田字東牛ヶ池 | 1998年09月～10月 | 縄文:(ピットなど) | 第36集(H12) |
| 29 | 鶴田東牛ヶ池遺跡(第2次調査) | 大字鶴田字東牛ヶ池 | 1998年10月～11月 | 縄文～弥生集落:(竪穴式住居、土壌など) | 第36集(H12) |
| 30 | 鶴田西牛ヶ池遺跡(第1次調査) | 大字鶴田字西牛ヶ池 | 1998年12月～1999年03月 | 弥生:(竪穴式住居など) | 第36集(H12) |
| 31 | 鶴田木屋ノ角遺跡(第1次調査) | 大字鶴田字木屋ノ角 | 1998年12月～1999年02月 | 古代～中世:(官道、土壌など) | 第36集(H12) |
| 32 | 鶴田牛ヶ池遺跡(第2次調査) | 大字鶴田字牛ヶ池 | 1998年11月～1999年02月 | 古代官道 | 第36集(H12) |
| 33 | 鶴田牛ヶ池遺跡(第3次調査) | 大字鶴田字牛ヶ池 | 1999年02月 | 縄文:(ピットなど) | 第36集(H12) |
| 34 | 鶴田牛ヶ池遺跡(第4次調査) | 大字鶴田字牛ヶ池 | 1999年02月～03月 | 縄文～古墳:集落(竪穴式住居、甕棺など) | 第36集(H12) |
| 35 | 鶴田牛ヶ池遺跡(第1次調査) | 大字鶴田字牛ヶ池 | 1998年11月～12月 | 縄文:(炉など) | 第38集(H13) |
| 36 | 久恵権藤遺跡(第1次調査) | 大字久恵字権藤 | 1994年11月～1995年07月 | 弥生～中世:集落(溝など) | 第58集(H15) |
| 36 | 久恵権藤遺跡(第2次調査) | 大字久恵字権藤 | 1996年01月～02月 | 弥生～中世:(流路など) | 第58集(H15) |
| 37 | 久恵中野遺跡(第1次調査) | 大字久恵字中野 | 1996年03月～04月 | 縄文～古墳:集落(石組炉、竪穴式住居など) | 第58集(H15) |
| 38 | 久恵上川原遺跡(第1次調査) | 大字久恵字上川原 | 1996年01月～03月 | 古墳:集落(竪穴式住居など) | 第58集(H15) |
| 39 | 久恵東岸遺跡(第1次調査) | 大字久恵字東岸 | 1996年01月～03月 | 弥生:集落(溝、柵列など) | 第58集(H15) |
| 40 | 鶴田武津恵遺跡(第1次調査) | 大字鶴田字武津恵 | 1995年08月～12月 | 弥生・中世:(流路など) | 第62集(H16) |
| 41 | 鶴田橋原遺跡(第2次調査) | 大字鶴田字橋原 | 1995年10月～12月 | 中世:集落周辺 | 第62集(H16) |

して問題ないことを示していよう。

これに絡む可能性のある遺構は落とし穴状遺構である。東部地区調査内では鶴田岸添遺跡第1次(4)・同第2次(8)と久患上川原遺跡(38)、久恵内次郎遺跡第2次(23)の3遺跡4地点から見出されている。久患上川原遺跡の調査では、遺物がないことから積極的な評価は避けているが、そこに居住するキャッチメントエリアとしての可能性を指摘している。距離的にやや離れるが、鶴田岸添遺跡の場合も当該期の所産とするならば、北側約500mに所在する鶴田牛ヶ池遺跡の集落にかかる同様のエリアと捉えることができるのであろうか。500mというのは決して遠い距離ではなく、集落を中心とした居住者の活動範囲を窺うには興味深い所見と言えるのではなかろうか。検討を重ねたい。

このように、少なくとも鶴田地区に牛ヶ池遺跡を中心とした集落、久恵地区に中野遺跡を中心とした集落が存在していたとみていいだろう。両者はほぼ同時期であり、従前から知られている裏山遺跡も現尾島集落のすぐ北西側で近接しており、縄文時代早期後半頃いち早くこの地区一帯に人々が住み着き、活動を始めていたことが知られる。

弥生時代 (Fig.23)

土器や石器のみを出土する地点は多数にのぼるが、安定した遺構を検出した地点は限られ、一定の傾向が読みとれる。

まず竪穴住居を検出した地点から検討する。まとめて検出されているのは大きく2地点であり、鶴田岸添遺跡第1次(4)の1棟、同第2次(8)の7棟、同第4次(10)の3棟と、鶴田西牛ヶ池遺跡(30)の13棟である。まず鶴田岸添遺跡は第3次が比高差わずか1m前後ながら第1・2次とは低地を隔てて存在しており、時期的に近接したものであるが残存状況もかなり悪く、同一に評価するのは難しい。鶴田西牛ヶ池遺跡は、後期中頃から終末にかけてのもので、岸添の集落と時間的な隔たりはほとんどない。ただ西牛ヶ池遺跡の場合は、掘立柱建物や円形周溝遺構を伴っており注意される。

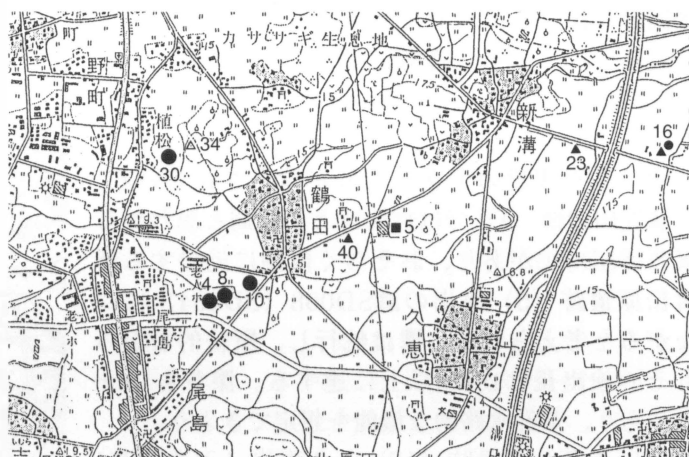


Fig.23 弥生時代遺構検出地点 (1/30,000)

●竪穴住居 ▲大溝 ■土坑 △甕棺

今回の東部地区調査は広域に及ぶものの、集落遺跡が確認されたのはいずれも鶴田の現集落から西側であり、両者は時期的にも近接している。他の時期の遺構では、中期初頭に属する土坑が新溝松原遺跡(5)で1基、中期前半の甕棺が鶴田牛ヶ池遺跡第4次(34)であるほか、後期と思われる大溝が久恵内次郎遺跡第2次(23)と鶴田武津恵遺跡(40)で検出されるにすぎない。

弥生時代の東部地区は、散発的に遺構はみられるものの安定した生活基盤の形成は、後期でも終り近くにならないと成立していないことが理解できよう。ただこの集落も縄文時代早期の遺構や遺物の出土地点と重なることは注意しなければならない。

また大溝の存在も注意され、鶴田武津恵遺跡では崩壊していたものの堰と推定できそうな遺構が確認されている。今後は、未調査地点では水田を含めた農地としての利用も視野に入れた調査が必要となるだろう。また、1基しか検出されていない甕棺の存在から、近在に同時期の人々が生活していたことは疑いない。少なくとも鶴田の現集落を中心とした周辺は、弥生時代の筑後市を語る上で重要な地点であることは間違いない。

古墳時代 (Fig.24)

竪穴住居を検出した地点が複数あり、列記してみる。まず新溝丸田遺跡(1)で4棟、鶴田西畑遺跡(12)で2棟、鶴田東牛ヶ池遺跡第2次(29)で1棟、鶴田牛ヶ池遺跡第4次(34)で1棟、久恵中野遺跡(37)で1棟、久患上川原遺跡(38)で1棟が検出されている。鶴田東牛ヶ池遺跡の1棟は遺物がほとんど

どなく年代の決め手を欠くが、他は概ね柳田康雄氏の言うⅢa期（『古墳時代の研究6』）を中心とした時期に該当する。近接した時期の集落が調査対象地区内に散在するように見受けられるが、まとめると4つのグループに分けられそうであり、小規模な集落が展開していたことがわかる。

出土遺物では、新溝丸田遺跡と鶴田西畑遺跡のものから、小型丸底壺とミニチュア土器が多数出土していることが注目される。特に鶴田西畑遺跡では勾玉や鉄製方形鋤先が同時に出土しており、注意せねばならない遺構である。当該遺構に関しては報告書（第25集）に詳しく述べられるので参照されたい。

溝はやや規模の大きなものが検出されている。新溝丸田遺跡（1）では住居跡と同時期と思われる東西溝SD030があり、おそらく西側に近接する新溝松原遺跡（5）検出の溝SD008（SD004）につながると考えられる。溝は蛇行し、断続的ながらもその検出長は160m以上に達する。深さも1.8m余りあり、基幹水路的な機能を想定できよう。

他に久恵今町遺跡（16）と久恵岸ノ下遺跡第1次（25）・第2次（26）があるが、いずれも6世紀中頃を前後する時期に埋没するものである。両者間にはかなり距離があり、関連は追えない。また集落との関係も現状ではつかめない。

当該期の遺構は、4世紀後半から5世紀前半頃のグループと6世紀中頃のグループがあるが、前者の段階に小規模な集落を確認できる程度で、他は生活の痕跡を見出す地点に恵まれなかった。しかし、竪穴住居検出地点は前代の遺構検出地点と重複しており、土地利用のあり方が窺えて興味深い。

古代 (Fig.25)

東部地区調査では顕著な遺構はほとんどない。その中で、鶴田木屋ノ角遺跡（31）及び鶴田牛ヶ池遺跡第2次（32）で確認された道路跡は目を引く。これは古代官道の西海道に相当するものであることは早くに周知されており、すでに報告書（第45集）でも検討を行っているので詳細はそちらを参照願いたい。

ここでは鶴田木屋ノ角遺跡出土の墨書土器に注意したい。市内の官道近くの遺跡では羽犬塚中道遺跡第2次が墨書土器を出土した地点であり、官道

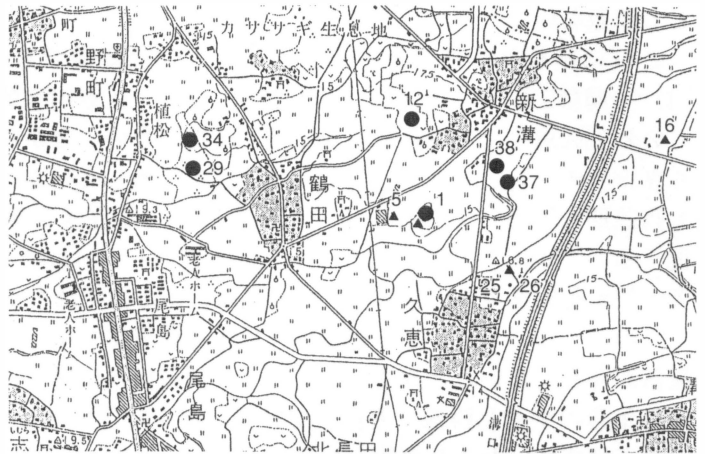


Fig.24 古墳時代遺構検出地点 (1/30,000)

●竪穴住居 ▲溝

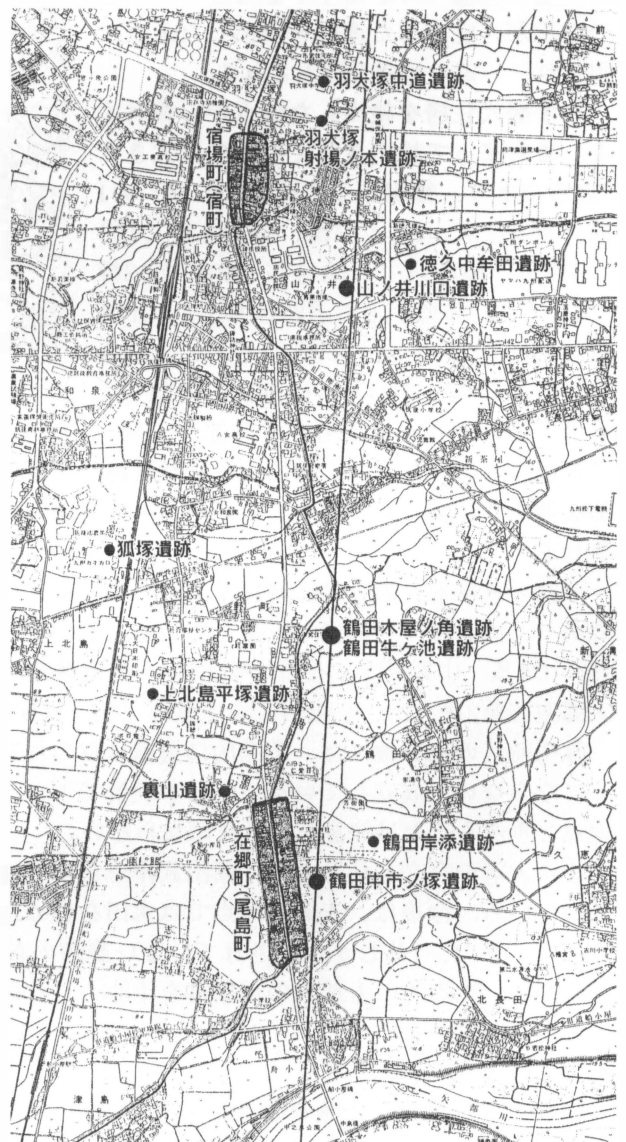


Fig.25 古代官道推定線と関連遺跡 (1/300)

(筑後市報告第45集より)

沿いに公の施設あるいはそれに関わる人物の居住空間を推定する資料となる。

官道自体の調査は全国的にここ10年ほどで著しく進展し、ルートの解明にとどまらず、構造や構築方法の研究など様々な角度から研究されているが、今後は官道に沿う遺跡の構造や性格についても検討を行う必要が出てこよう。本市でもそうした観点から調査を進めてゆきたいと考える。

中世 (Fig.27)

遺構や遺物を確認した地点は多いが、集落を構成する遺構の確認となるとかなり限定されてくる。このうち鶴田榎原遺跡第1次 (3) 及び第2次 (41) は隣接した調査で、且つ規模の大きな建物や溝が検出され、屋敷墓と考えられる円形周溝墓も確認されるなど、他を圧倒している。ここで両地点を図上で配置し、遺構の構成について若干の検討を試みておく (報告書に掲載される第1次調査の座標は、東で南に大きく振るという誤記が判明した。Fig.26は判明する範囲で訂正を行い、配置したものであることをご了解願いたい)。

まず調査区の中央西寄りにある南北大溝2SD100は最近まで使用されていたこともあり詳細を明らかにできないままだが、報告文中でも指摘したとおり、それを境に遺構のあり方が大きく異なるため、区画を目的とした溝であると考えて問題なかろう。その視点で第1次調査区をみると、2SD100の延長上は現在の道路となり未調査のまま、辛うじてその一部が調査区に顔を出している。その遺構は調査区の南端で終了しているようであるが、その付近から東に派生する2条の溝1SD001と010は、その間隔をおよそ6mに保って約38mの距離を平行して穿たれている。その挟まれる空間を道路とすると、先の大溝で行き止まり、しかもそこを境に遺構の状況が異なることになる。第1次調査の未調査区 (方位記号付近) が非常に気になる所であるが、おそらくその付近に門のような施設があり、大溝で区切られて、屋

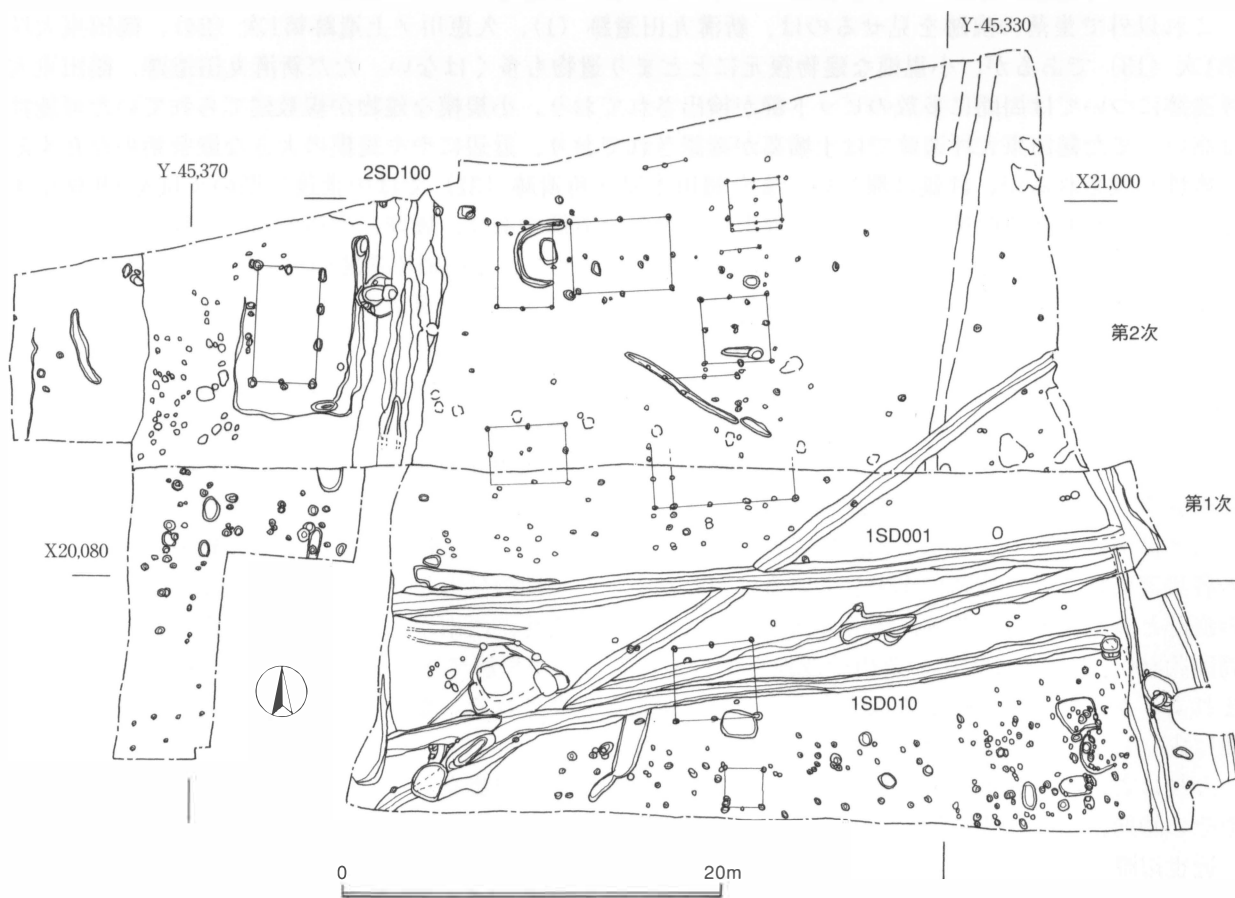


Fig.26 鶴田榎原遺跡第1・2次調査接合図 (1/400)

敷の内外を区分する構造になっていたと推定できる。その道路の東側は調査区内で南へ折れ曲がる可能性があるが、詳細は将来の調査に委ねられる。

さて東西道路の南側の空間もその北側に比較すると状況を異にしている。北側がおそらく当初は広い空間を維持し、円形周溝墓と思しき遺構のみが存在していたと思われるが、道路の南側では特に東に偏って小規模な遺構が複数確認されている。いずれも溝群と同時期の所産であり、ここにも異なった生活の足跡が窺える。

これらの遺構は概ね13世紀中頃から14世紀前半のものと考えられる。年代の決定要素は多く土器に頼るところであるが、他の地点と比較して陶磁器の出土が目立っているといえる（定量的な分析を経たわけではない）。こうした当時としては高級な品物を入手し、使用できる人物が居住者として相応しく、しかも門前？には道路が取り付き、大きな溝で周囲（一部か）を区画するという屋敷地を保有する。また円形周溝遺構をこれに付随する墓地と見れば、当時の在地有力者（いわゆる在地領主層か）の生活水準が窺えそうである。

とにかく鶴田榑原遺跡は、中世盛期における有力者の屋敷地とみて問題ないだろう。

これ以外で集落の痕跡を見せるのは、新溝丸田遺跡（1）、久恵川ノ上遺跡第1次（24）、鶴田東大坪第1次（13）であるが、小規模な建物復元にとどまり遺物も多くはない。ただ新溝丸田遺跡、鶴田東大坪遺跡については周囲に多数のピット群が検出されており、小規模な建物が複数建てられていた可能性は高い。また鶴田東大坪遺跡では土墳墓が確認されており、近辺にやや規模の大きな屋敷地の存在する可能性が残されるが、評価は難しい。また鶴田木屋ノ角遺跡（31）では中世後半期の土坑を2基検出するが、いずれも瓦質の挿り鉢を臥せて埋置する珍しい遺構であり、周囲に生活の匂いを残す。いずれにせよ先の鶴田榑原遺跡と比べるとその格差は歴然としており、鶴田榑原遺跡の優位性が示される。

また後述する近世以降と同様、この時期になると大小さまざまな溝遺構が検出されている。まず、鶴田榑原遺跡第1次（3）と同第2次（41）は屋敷地の区画に伴うものが中心とみられるが、それ以外のものも検出されており、安易に除外する訳にはいかない。その他の出土地点を追ってみると、久恵野元第1次（6）、同第2次（7）、鶴田岸添第3次（9）、鶴田西田遺跡（11）、鶴田東大坪第2次（18）、久恵岸ノ下遺跡第1次（25）、同第2次（26）、久恵権藤遺跡（36）、久恵中野遺跡（37）、久恵上川原遺跡（38）、鶴田武津恵遺跡（40）などがあげられる。いずれも調査上の制約から検出された溝どうしを有機的に結ぶことは困難である。そこでFig.27に落とした中世遺跡のドットを眺めると、現在の鶴田・久恵・新溝の各集落に挟まれた範囲に集中しているのがわかる。ただ別の見方をすると、大小の規模を問わず集落の痕跡とみた鶴田榑原遺跡、新溝丸田遺跡、久恵川ノ上遺跡が西南から東北方向へ一直線に並び、その周囲約400mの範囲に大半の遺構確認地点が含まれることが理解できる。一部に時期の遅れるものも含まれようが、概ね13世紀中頃以降を中心とした所産と見なされる。集落と周辺の土地開発が似通った時期に成立していることが理解でき、重要な所見と考える。

今後はこの状況を追認する必要があるとあり、より詳細な情報の収集を行うことにより、中世遺跡の広がりやその時期、規模、構造などに言及することが可能となろう。大きな課題として提示しておきたい。

近世以降 (Fig.28)

ほとんどの地点で確認された方位不定の溝群が、この時期に該当すると考えている。またそのうちのいくつかは現状（ここでは、ほ場整備事業直前を指す）の畦畔に沿うものがあり、現状の風景の成立時



Fig.27 中世遺構検出地点 (1/30,000)

●掘立柱建物等 ▲溝

期を知る重要な遺構として捉えられるが、残念ながらいずれの遺構も出土遺物に恵まれず、年代の特定は難しい。また調査地点が削平を余儀なくされる部分に限定していることから、連続した地点での確認はほとんど出来ていない。そのため、中世と同様に各溝どうしの有機的なつながりを追求することは、今回の東部地区調査における成果だけでは難しい。今後、機会を得るたびに追跡する必要が指摘できる。

また、近世の集落跡は未確認であるが、広義ながら当該期の遺物は報告されるものだけで8地点に及んでいる。このうち、鶴田西牛ヶ池遺跡(30)と鶴田木屋ノ角遺跡



Fig.28 近世遺構・遺物出土地点 (1/30,000)

●遺物出土地点(報告地点) ▲溝(時期不詳含む)

(31)は現在の植松集落の東側近接地、鶴田溝代遺跡(19)は現鶴田集落の北端部近接地、新溝犬丸遺跡(17)は現新溝集落の西側近接地、久恵川ノ上遺跡第1次(24)は現新溝集落の南側近接地、久恵岸ノ下遺跡第2次(26)は現久恵集落の北東近接地、さらに鶴田岸添遺跡第1次(4)は現尾島集落の東側近接地にあたる。これで明らかなように、いずれも現在の集落に近い地点の調査で当該期の遺物が見られることがわかる。個々の年代については出土資料の詳細な分析を経ないと語れないが、現集落の出現が少なくとも近世まで遡ることを示唆すると同時に、近世の集落は現集落下に眠っていると予想される。

さて、この時期の注目すべき遺物としては鶴田西牛ヶ池遺跡(30)の生産用具がある。時期は18世紀後半から幕末頃とあるが、量的にもまとまって出土している。これに関連するとみられる遺構は見出せないが、近辺で何らかの生産に関わる遺跡が見出される可能性が高い。さらに同遺跡から出土する平瓦も大きな宿題の一つである。一見、北部九州に見られる初期瓦と誤認するような調整法を用いたもので、以前の報告では古い遺物と判断して誤記し、辛うじて追記を作成して注意を喚起した経緯がある(第52集)。当該瓦はこれ以外に東部地区調査の範囲では見出されていないが、すでに市内の数カ所で散在的に見つかっており、筑後市の近世・近代の産業を語る重要な遺物になりそうである。調査段階での注意が必要である。

このようにこの時期の遺構を検討することは、現在の筑後市の風景が成立した年代を知るだけでなく、現在のような土地利用を行うようになる年代とその背景を探る有効な資料となり得ると考える。現在の集落内はもとより、その周辺部の調査も重要であることをここで明らかにしておきたい。

以上、東部地区調査の成果を駆け足で概観したが、各時代を通じて人々の足跡を辿ることができた。ただいずれも断続的であり、例えば縄文時代から弥生時代の間にはきわめて大きな空白があり、以後の時代間でもかなりの空白が認められる。課題としては筑後市及びこの周辺地域で、まずこの空白を埋める地点の存在を見出すことであろう。しかし、そのような空白が多く見出されても人間の生活空間は、重複または近接している場合が多い。このことは人間の居住と雖も自然の理にかなない、自然と共存できる土地を先人達が選択してきた結果にほかならない。その点で現代は、まったく自然とは対峙し、あるいはそれを無視し、征服することで人間の居住空間を広げているようにも映る。

別表 出土遺物一覧表

鶴田武津恵遺跡 A区

| S-番号 | 遺構番号 | 弥生土器 | 須恵器 | 土師器 | 瓦器 | 磁器 | 陶器 | 石製品 | その他 |
|------|-------|-----------|-----|-----|----|----|----|-----|-----|
| 9 | SD009 | 甕片 | | | | | | | |
| 60 | SX060 | 甕片 | | | | | | | |
| 65 | SX065 | 甕片 | | | | | | | |
| 表土 | | 壺片、甕片、甕口縁 | | | | | | | |

鶴田武津恵遺跡 B区

| S-番号 | 遺構番号 | 弥生土器 | 須恵器 | 土師器 | 瓦器 | 磁器 | 陶器 | 石製品 | その他 |
|------|-------|------|-----|--------------------|-----|---------------|--------|-----|--------|
| 1Ⅰ層 | SD001 | | | 小皿片、甕、鍋 | 火舎片 | 白磁皿Ⅲ?...見込み掻取 | | | 焼土塊 |
| 1Ⅱ層 | SD001 | | | 坏片、皿片、鍋片 | | | | | 焼土塊 |
| 1Ⅲ層 | SD001 | | | 小皿b(糸切)、鍋片 | | | | | |
| 8 | SD008 | | | 小皿b(糸切)、鍋片、坏(底部穿孔) | 火舎片 | 龍育磁碗Ⅳ? | | | 土錘、焼土塊 |
| 表土 | | | | 片 | | | 片...近代 | | |

鶴田武津恵遺跡 C区

| S-番号 | 遺構番号 | 弥生土器 | 須恵器 | 土師器 | 瓦器 | 磁器 | 陶器 | 石製品 | その他 |
|------|-------|------|-----|----------|----|----|----|-----|-----|
| 3下層 | SD003 | 甕 | | | | | | 石包丁 | |
| 5下層 | SD005 | 片 | | | | | | | 木杭 |
| 6下層 | SD005 | 甕片 | | | | | | | |
| 表土 | | 片 | | 土鍋片、小皿b片 | | | 片 | 黒曜石 | |

鶴田武津恵遺跡 D区

| S-番号 | 遺構番号 | 弥生土器 | 須恵器 | 土師器 | 瓦器 | 磁器 | 陶器 | 石製品 | その他 |
|------|------|------|-----|----------------|----|---------|----|-----|-----|
| 表土 | | | | 坏(糸切)、皿(糸切)、甕片 | | 片...近代~ | | | |

鶴田武津恵遺跡 E区

| S-番号 | 遺構番号 | 弥生土器 | 須恵器 | 土師器 | 瓦器 | 磁器 | 陶器 | 石製品 | その他 |
|------|------|------|-----|-----|----|---------|----|-----|-----|
| 表土 | | | | | | 片...近代~ | | | |

鶴田武津恵遺跡 F区

| S-番号 | 遺構番号 | 弥生土器 | 須恵器 | 土師器 | 瓦器 | 磁器 | 陶器 | 石製品 | その他 |
|------|-------|------|--------|----------|----|---------------------|---------|---------|-----------|
| 11 | SX011 | 片 | 坏片 | 坏片、土鍋、鉢片 | 碗片 | 龍育磁碗Ⅱ-B、白磁皿Ⅳ、片...近代 | 片...近代~ | | 瓦片、焼石、粘土塊 |
| 12Ⅰ層 | SD012 | | 鉢片 | 小皿(糸切) | | | 甕 | | 粘土塊 |
| 12Ⅱ層 | SD012 | | 蓋1片 | 坏a(糸切) | | | | | |
| 12Ⅲ層 | SD012 | | | | | | | | 片 |
| 12 | SD012 | | 甕(格子叫) | 片 | | | | | |
| 13Ⅰ層 | SD013 | | | 片 | | | | | |
| 16Ⅰ層 | SD016 | | 鉢片 | 片、 | | 龍磁碗Ⅱ-B、Ⅰ-4 | | | 粘土塊 |
| 16Ⅱ層 | SD016 | | | 坏片、鉢片 | | | | | 粘土塊 |
| 16Ⅲ層 | SD016 | | 瓦泉片 | | | | | | |
| 16 | SD016 | | | 坏片 | 鉢片 | | | | |
| 20 | SK020 | 片 | | | | | | | |
| 28 | SX028 | | | | | | | 石籬(黒曜石) | |
| 29 | | | | | | | 染付片 | | |
| 攪乱 | | | | ホウロク、甕片 | | | 片、染付 | | ガラス片、石炭片 |
| 表土 | | | | 片 | | | 染付皿片、片 | | すり石?片 |
| 表採 | | | | 皿片、坏片 | | | 片 | | |

鶴田武津恵遺跡 G区

| S-番号 | 遺構番号 | 弥生土器 | 須恵器 | 土師器 | 瓦器 | 磁器 | 陶器 | 石製品 | その他 |
|----------|--------|------|-----|-------------------|----------|---------|------------|-----------|--------|
| 21 I層 | SD021 | | 甕片 | 坏片(糸切)、皿片(糸切) | | | | | |
| 22 I層 | SD022 | | 甕片 | 土鍋片、坏片(糸切)、皿片(糸切) | 碗片 | 青磁片 | 片 | 石鏃(黒曜石) | 粘土塊 |
| 22 II層 | SD022 | | | 坏(糸切?)、土鍋、羽釜 | 片 | 青磁小皿 | | | 土錘、粘土塊 |
| 22 III層 | SD022 | | | 坏片 | | | | | |
| 22 | SD022 | | 甕片 | 坏(糸切)、皿片、土鍋 | 鉢片(すり鉢?) | 青磁片 | | | 錢、粘土塊 |
| 23 | SD023 | | | 甕片、坏片 | | 白磁皿?片 | | | |
| 24 | SD024 | | | 片 | | | | | |
| 24 II層 | SD024 | | | | すり鉢片 | | | | |
| 26 | SD026 | | | 甕片 | | | すり鉢片、施釉陶器片 | | |
| 31 | SB092e | | | 片 | | | | | |
| 32 | SB092d | | | | 碗片 | | | | |
| 33 | SB092c | | | 片 | | | | | |
| 34 | | | | 片 | | | | | |
| 35 | | | | 片 | | | | | |
| 36 | SB092b | | | 片 | | | | | |
| 37 | | | | 坏片 | | | | | |
| 風倒木 | | | | 片 | | | | | |
| 攪乱①S-22横 | | | 甕片 | 土鍋 | | | 染付片、陶器 | | 角釘 |
| 攪乱② | | | | 片 | | | 片 | | |
| 表土 | | 片 | 甕片 | 土鍋片、坏片、皿片 | | 青磁片、紅皿片 | 片 | 石斧か?、不明石器 | 土錘、粘土塊 |

鶴田橋原遺跡 第2次

| S-番号 | 遺構番号 | 弥生土器 | 須恵器 | 土師器 | 瓦器 | 磁器 | 陶器 | 石製品 | その他 |
|-------|---------|------|-----|-------------------------|----|------|----|-----|-----|
| S-38 | | | | 片 | | | | | |
| S-39 | | | | 片 | | | | | |
| S-41 | 2SX041 | | | | 碗片 | | | | |
| S-42 | | | | 鍋片 | | | | | |
| S-43 | | | | 片 | | | | | |
| S-44 | 2SX044 | | | 鍋片 | | | | | |
| S-45 | | | | 片 | | | | | |
| S-46 | 2SB085h | | | 片 | | | | | |
| S-47 | 2SX047 | | | 片、 | | | | | 土錘 |
| S-48 | 2SB093 | | | 片 | | | | | |
| S-49 | 2SB093 | ?片 | | | | | | | |
| S-50 | 2ST075 | | | 片 | | | | | |
| S-51 | 2SD051 | | | 碗C、坏片 | | 龍磁碗1 | | | |
| S-52 | | | | 片 | | | | | |
| S-53 | | | | 片 | | | | | |
| S-54 | | | | 片 | | | | | |
| S-55a | 2SB055a | | | 坏片(上層)、片(中層)、片(下層) | | | | | |
| S-55b | 2SB055b | | | 片(層位指示なし)、片(I層)、片(II層) | | | | | |
| S-55c | 2SB055c | | | 片(層位記載なし) | | | | | |
| S-55d | 2SB055d | | | 片(層位記載なし)、片(I層)、坏片(II層) | | | | | |
| S-55f | 2SB055f | | | 片、煮沸具片(層位なし)、坏a片(糸切) | | | | | |

| S-番号 | 遺構番号 | 弥生土器 | 須恵器 | 土師器 | 瓦器 | 磁器 | 陶器 | 石製品 | その他 |
|---------|---------|----------|------|--|----------|----------------------|----|----------|--------------|
| S-55g | 2SB055g | | | 坏片 (層位なし) | | | | | |
| S-55h | 2SB055h | | | 坏片 (1層) | | | | | |
| S-55i | 2SB055i | | | 片 (層位なし) | ?片 | | | | 土塊? |
| S-55j | 2SB055j | | | 片 (層位なし) | | | | | |
| S-56 | | | | 片 | | | | | |
| S-57 | | | | 片 | | | | | |
| S-58 | | | | 片 | | | | | |
| S-59 | 2SX059 | | | 小皿a (糸切?) | | | | | |
| S-61 | | | | 片 | | | | | 土塊 |
| S-62 | | | | 片 | | | | | |
| S-63 | | | | 坏a (糸切) | | | | | |
| S-64 | | | | 片 | | | | | |
| S-66 | | | | 片 | | | | | |
| S-67 | | | | 片 | | | | | |
| S-68 | | | | 甕片 | | | | | |
| S-69 | | | | 片 | | | | | |
| S-70 | 2SK070 | 甕片...層位無 | | 片、土塊 (小片) ...層位記載なし、坏a (糸切) ... 1層、片、小土塊... 2層、片... 3層 | ?片... 2層 | | | 砥石... 3層 | |
| S-71 | | | | 片 | | | | | |
| S-72 | | | | 坏片 | | | | | |
| S-73 | | | | 坏a片 (糸切) | | | | | |
| S-74 | | | | 片 | | | | | |
| S-75 | 2ST075 | | | 坏片... 1層、坏片... 2層 | | 同皿 1 ... 2層 | | | 土塊... 2層 |
| S-76 | | | | | | 龍磁碗 I | | | |
| S-77 | | | | | | 片 | | | |
| S-80 | 2SK080 | | | | | 龍磁碗 I | | 滑石鍋 (3層) | |
| S-81 | | | | | | 片 | | | |
| 表土 | | | 鉢片 | 鍋片、小皿a、坏片、煮沸具片 | 襦り鉢 | 龍磁碗 I-1、龍磁碗 II-B-1、片 | | | |
| ①②の間攪乱溝 | 2SD100 | | 甕、鉢片 | 鍋片、片、土人形 (小片) | | 片 | | | |
| 攪乱 | | | 鉢片 | 片、甕片、碗c片 | | 龍磁碗 II B・I-4、白磁紅皿蛸唐草 | | | 銅器片、鉄器片 (現代) |

写真図版

(凡例)

遺物写真の右下に記す番号は、

Fig. 番号—遺物番号

と理解されたい。



鶴田武津恵遺跡A区全景（下が北）



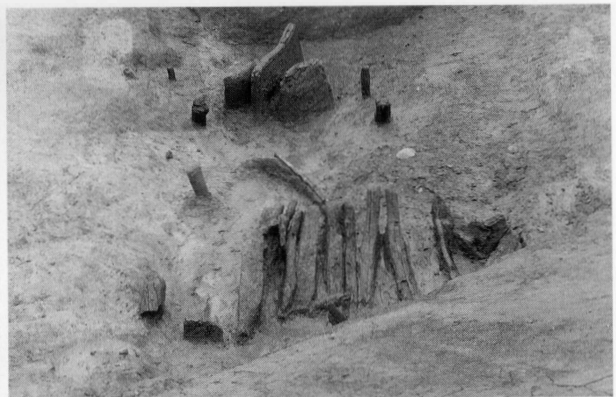
鶴田武津恵遺跡B区全景（下が北西）



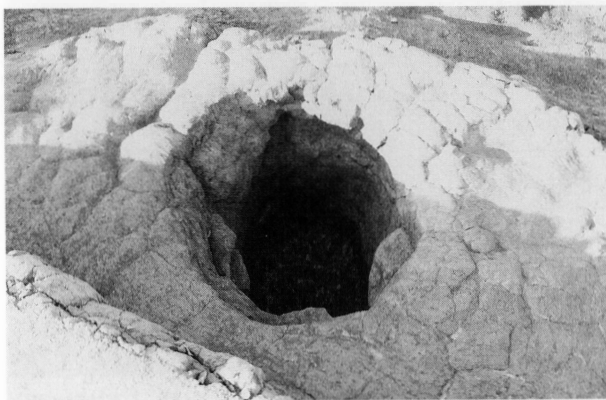
鶴田武津恵遺跡C区（写真右）・D区全景（上が北）



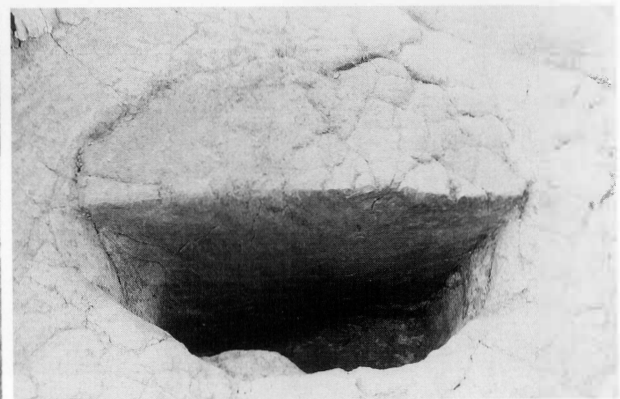
C区SD005完掘状況（北東から）



C区SD005堰状遺構検出状況（東から）



C区SK027完掘状況（南から）



C区SK027土層観察状況（南から）



鶴田武津恵遺跡E区全景（上が北北西）



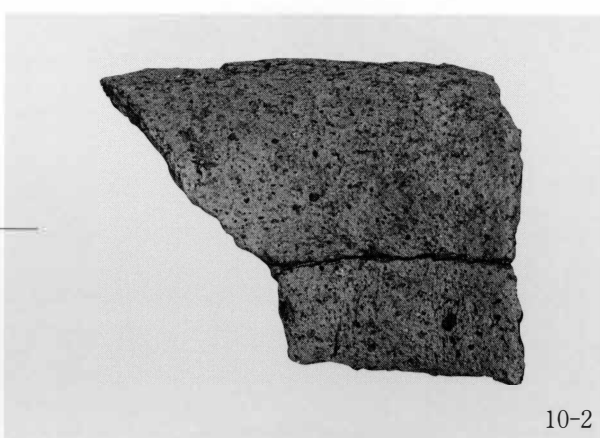
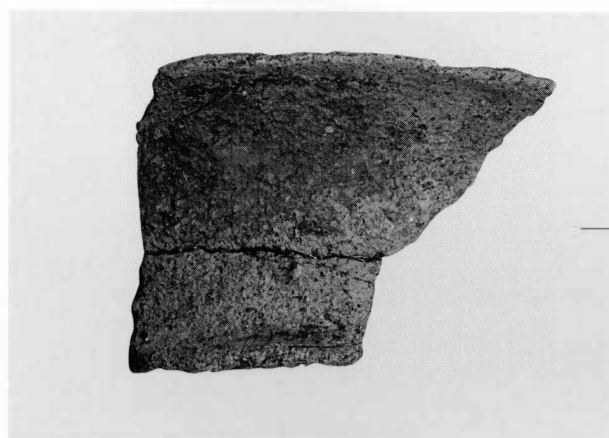
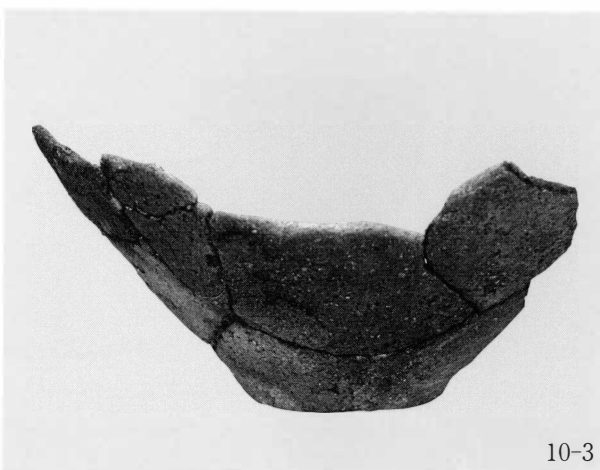
鶴田武津恵遺跡F区（写真左）・G区全景（下が北）



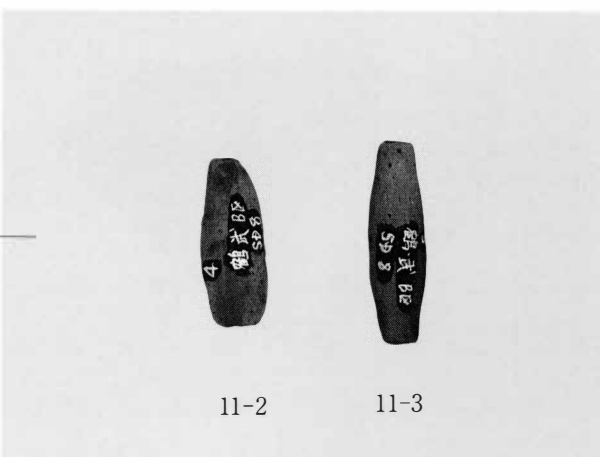
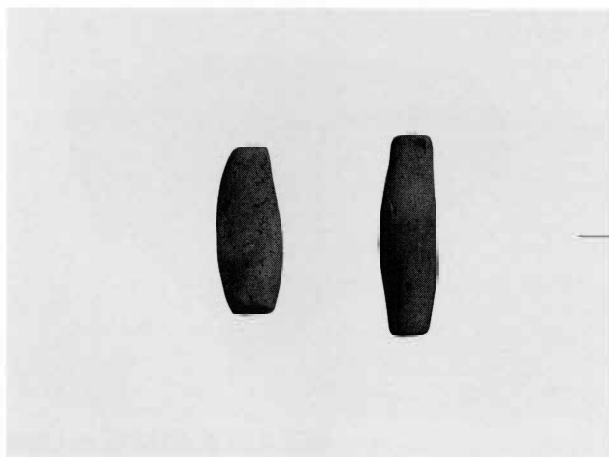
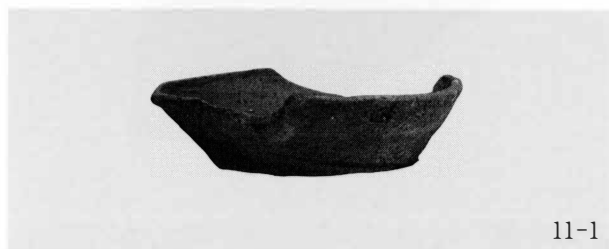
鶴田武津恵遺跡F区全景（上が北北東）



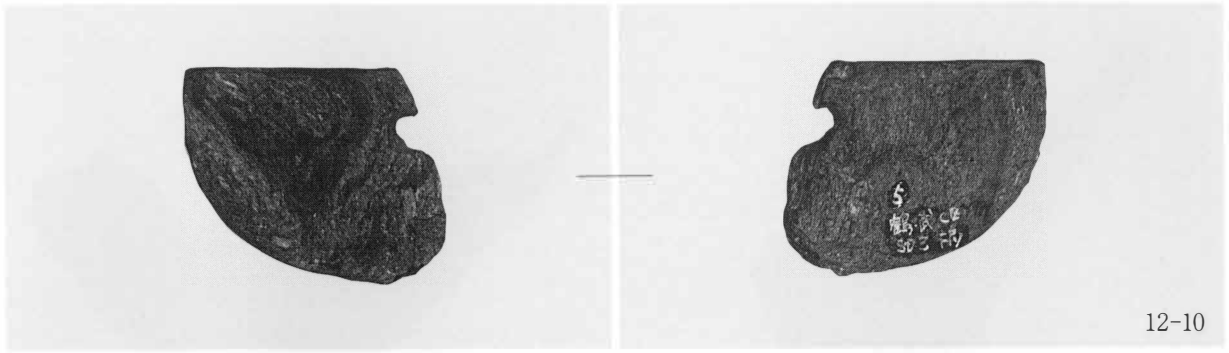
鶴田武津恵遺跡G区全景（下が北）



鶴田武津恵遺跡A区出土遺物

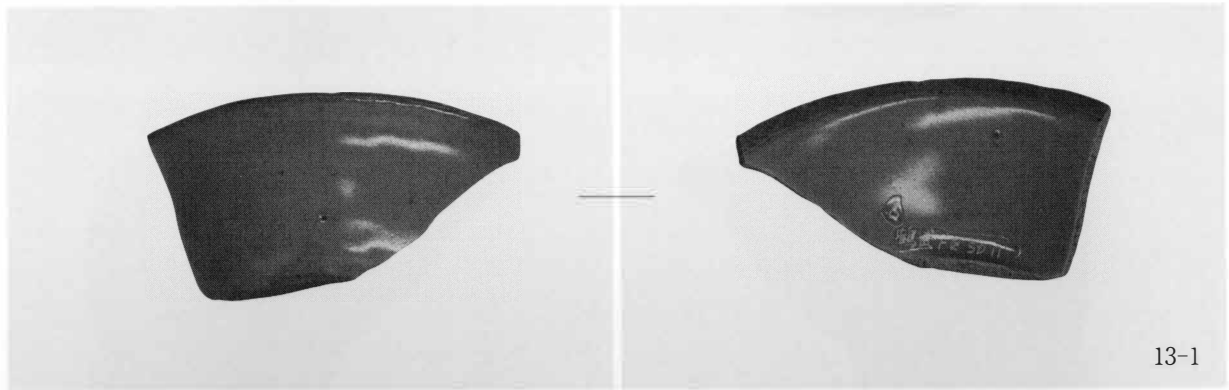


鶴田武津恵遺跡B区出土遺物

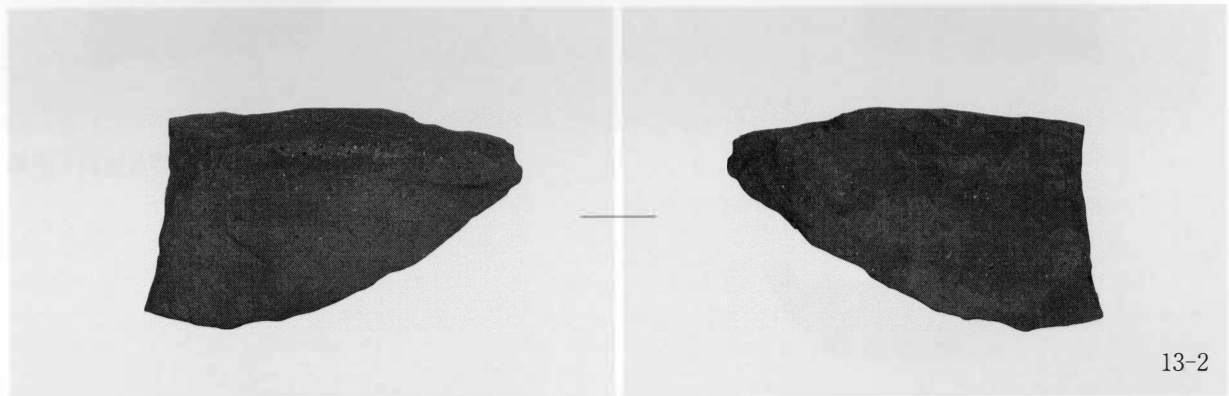


12-10

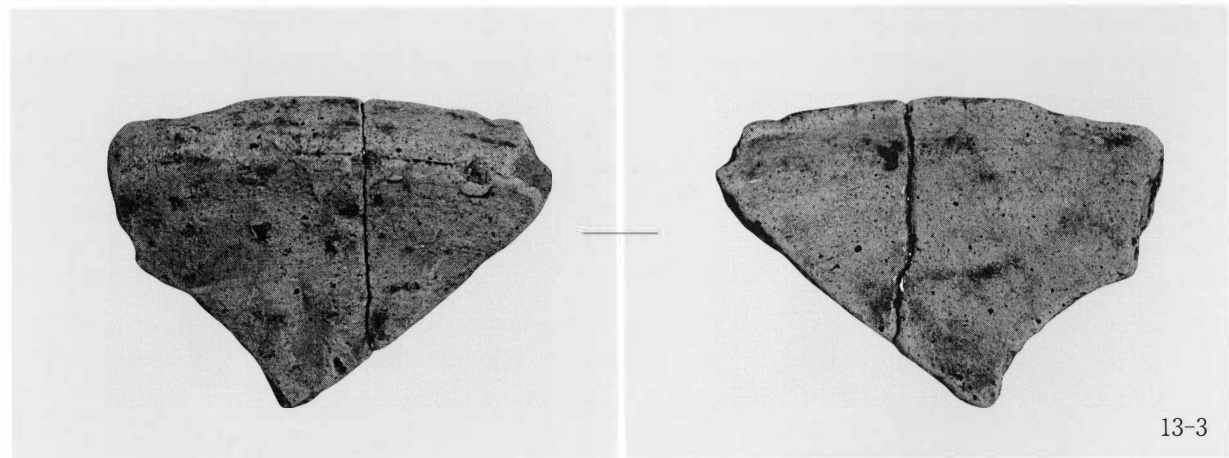
鶴田武津恵遺跡C区出土遺物



13-1

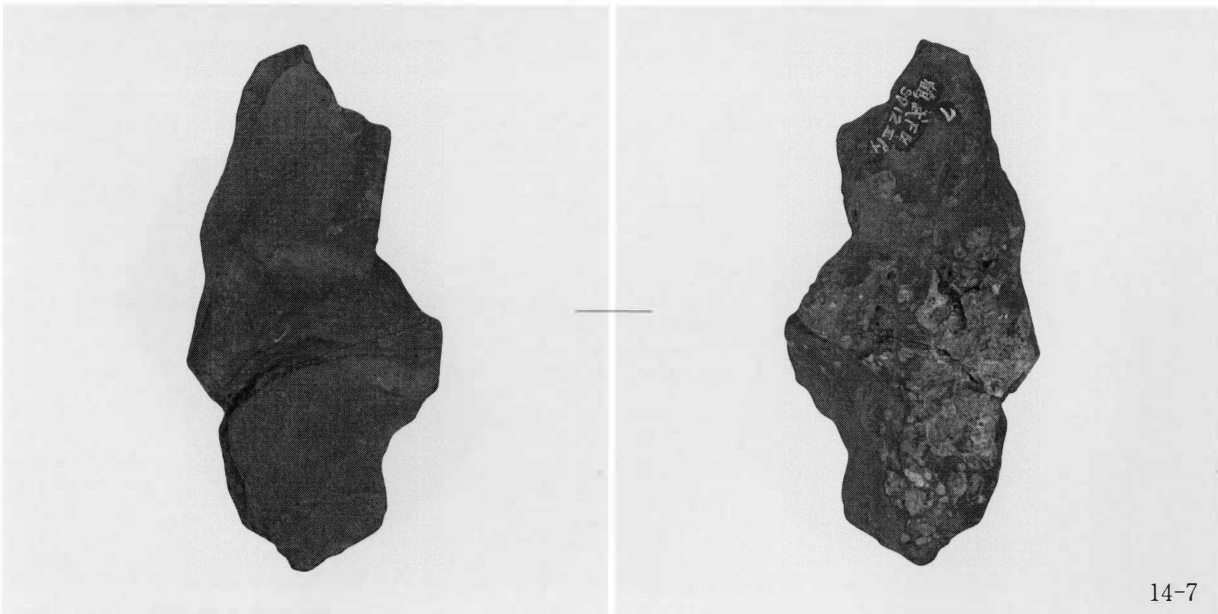
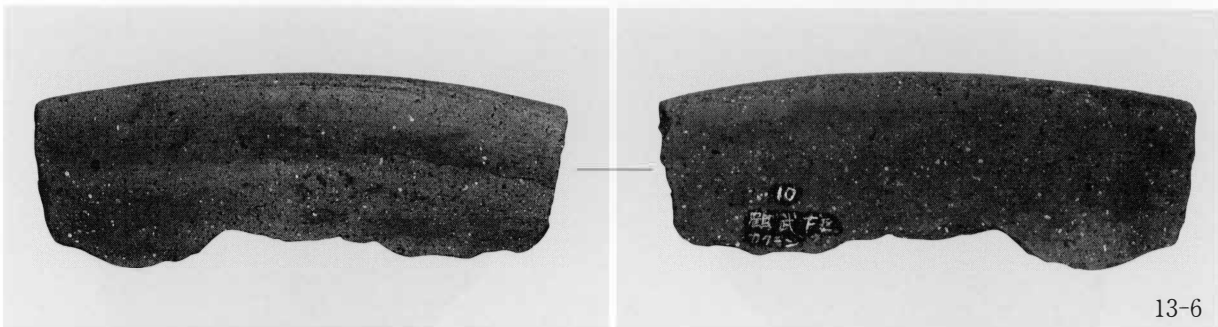
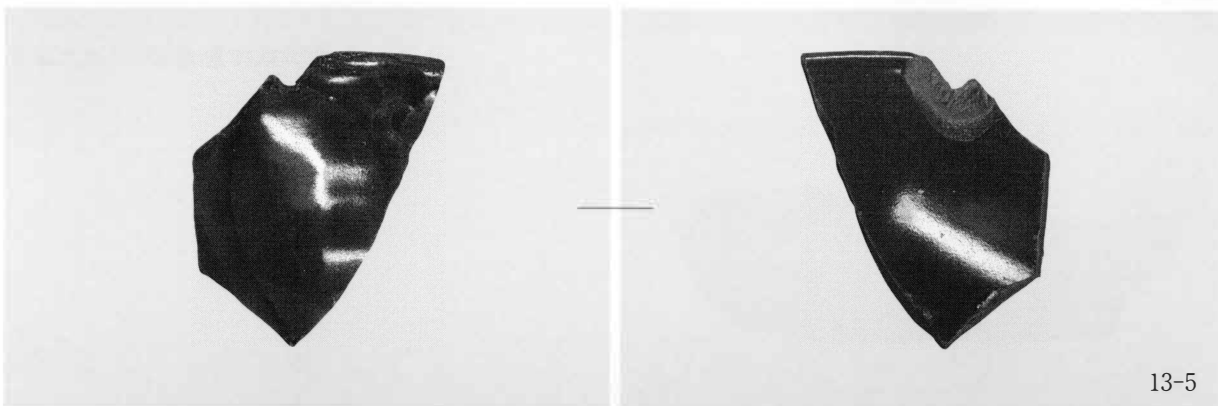


13-2



13-3

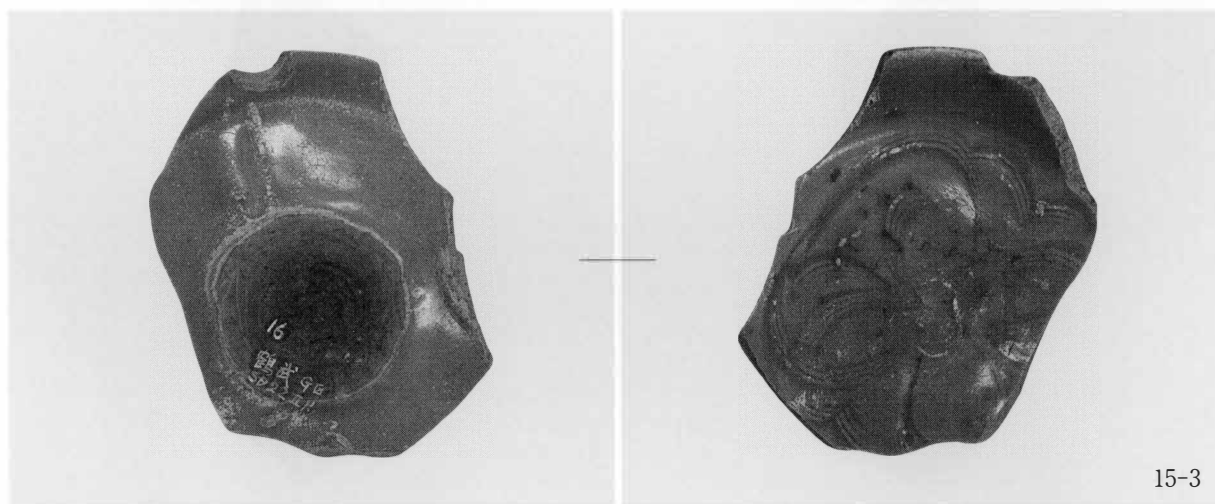
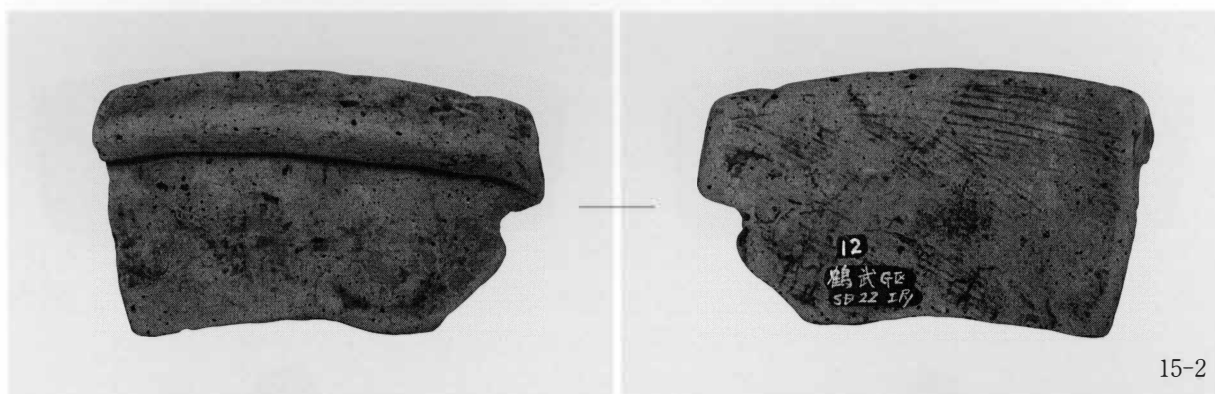
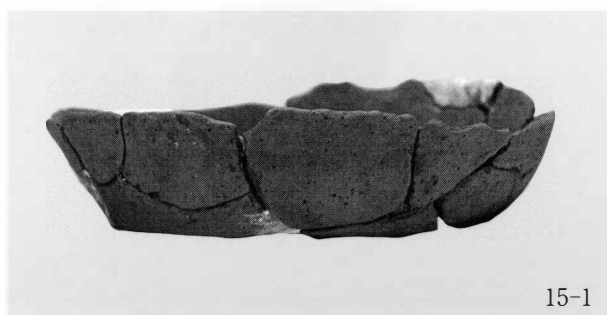
鶴田武津恵遺跡F区出土遺物



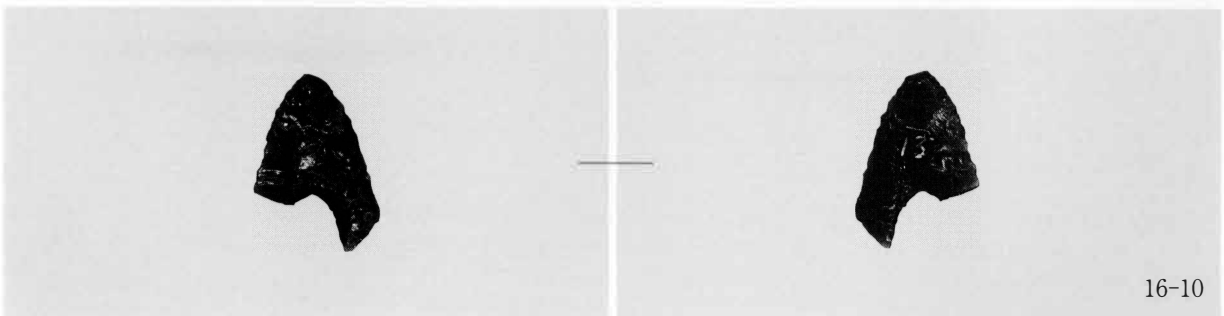
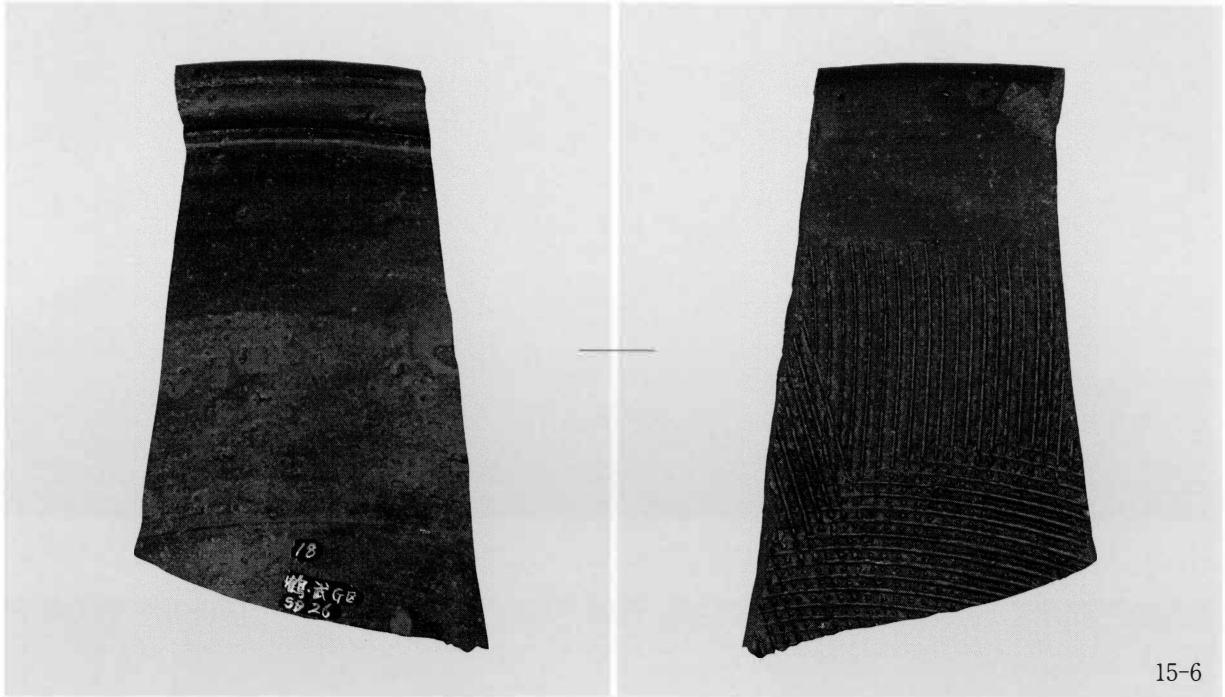
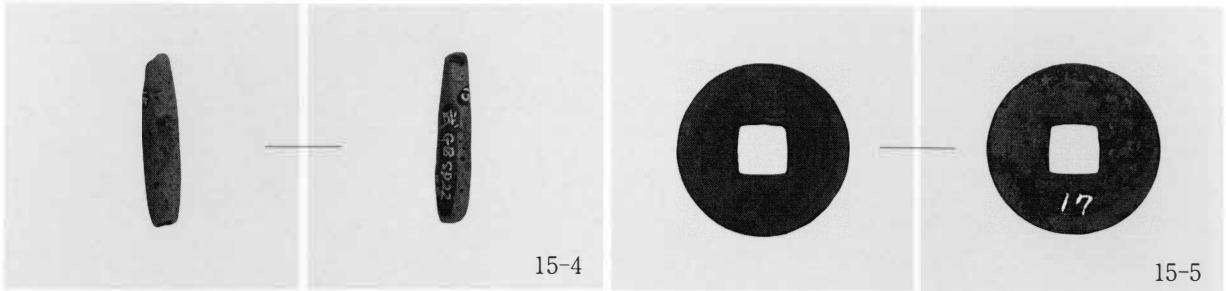
鶴田武津恵遺跡F区出土遺物



鶴田武津恵遺跡F区出土遺物



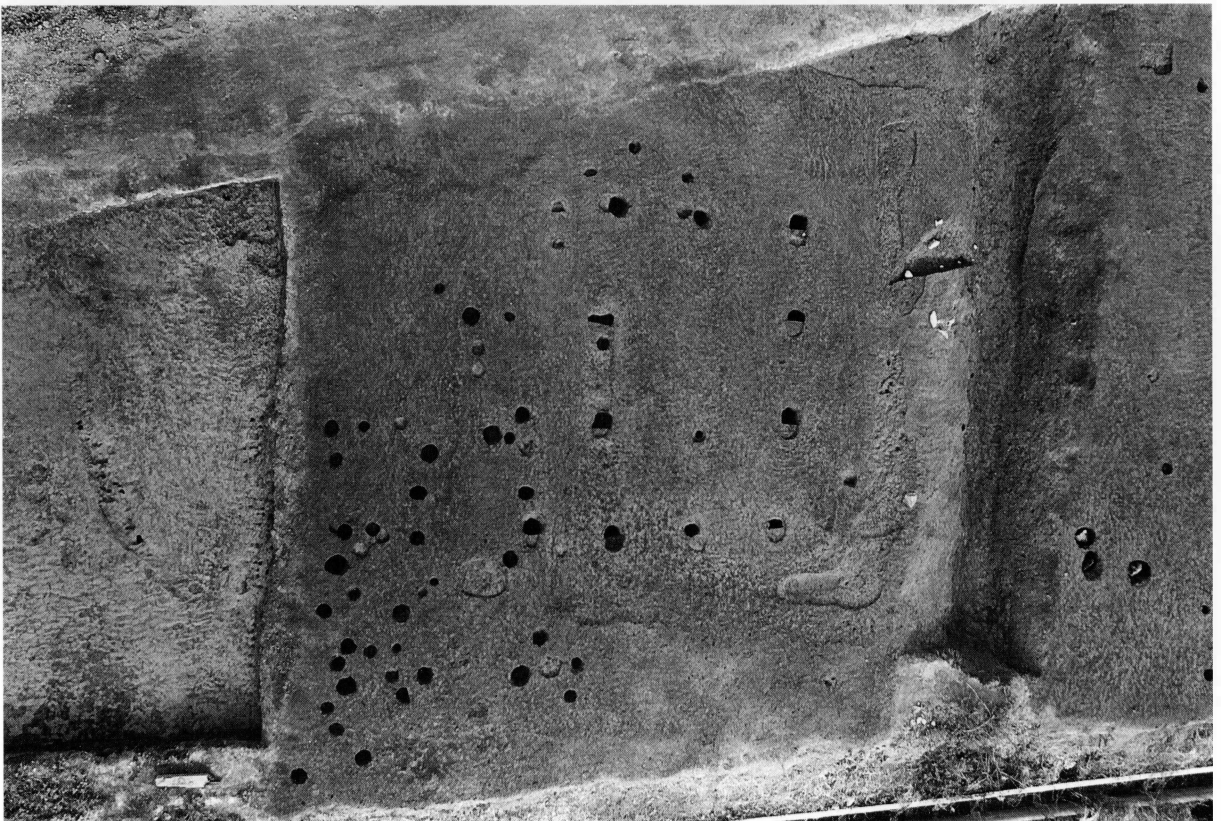
鶴田武津恵遺跡G区出土遺物



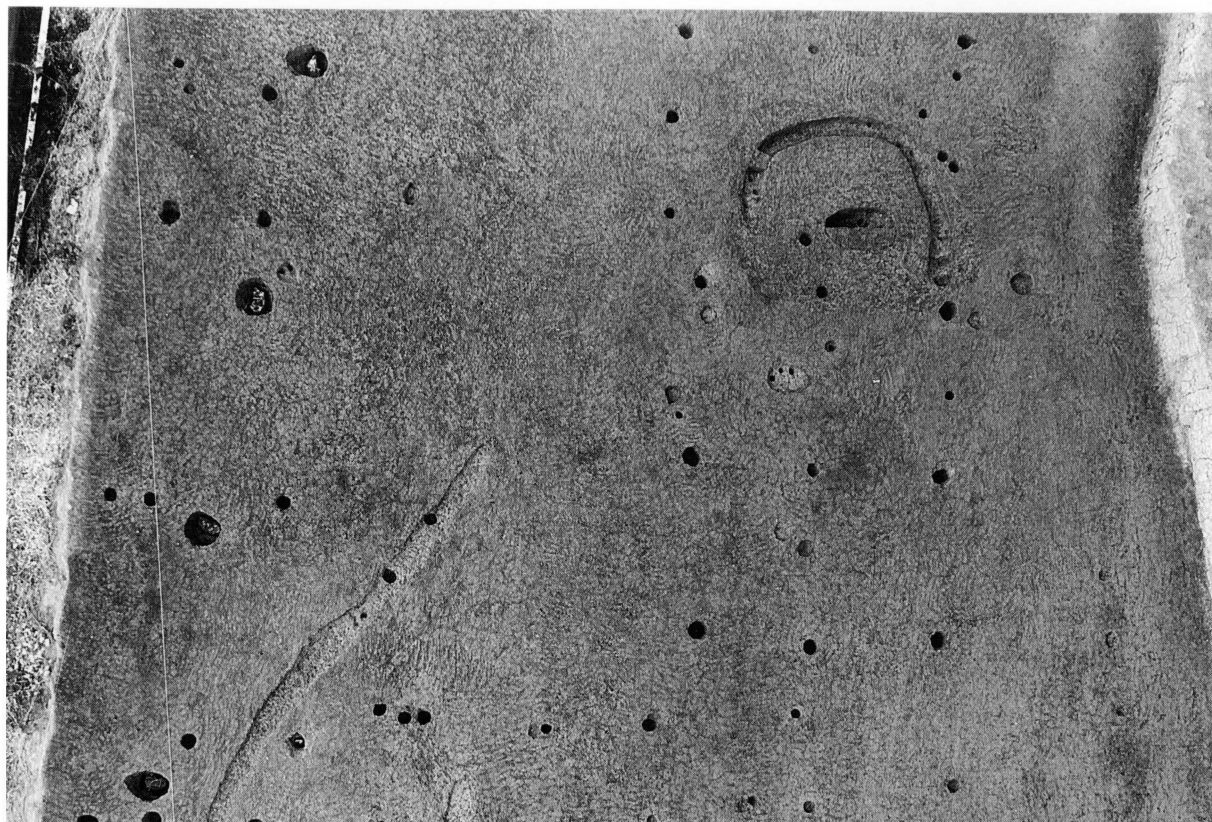
鶴田武津恵遺跡G区出土遺物



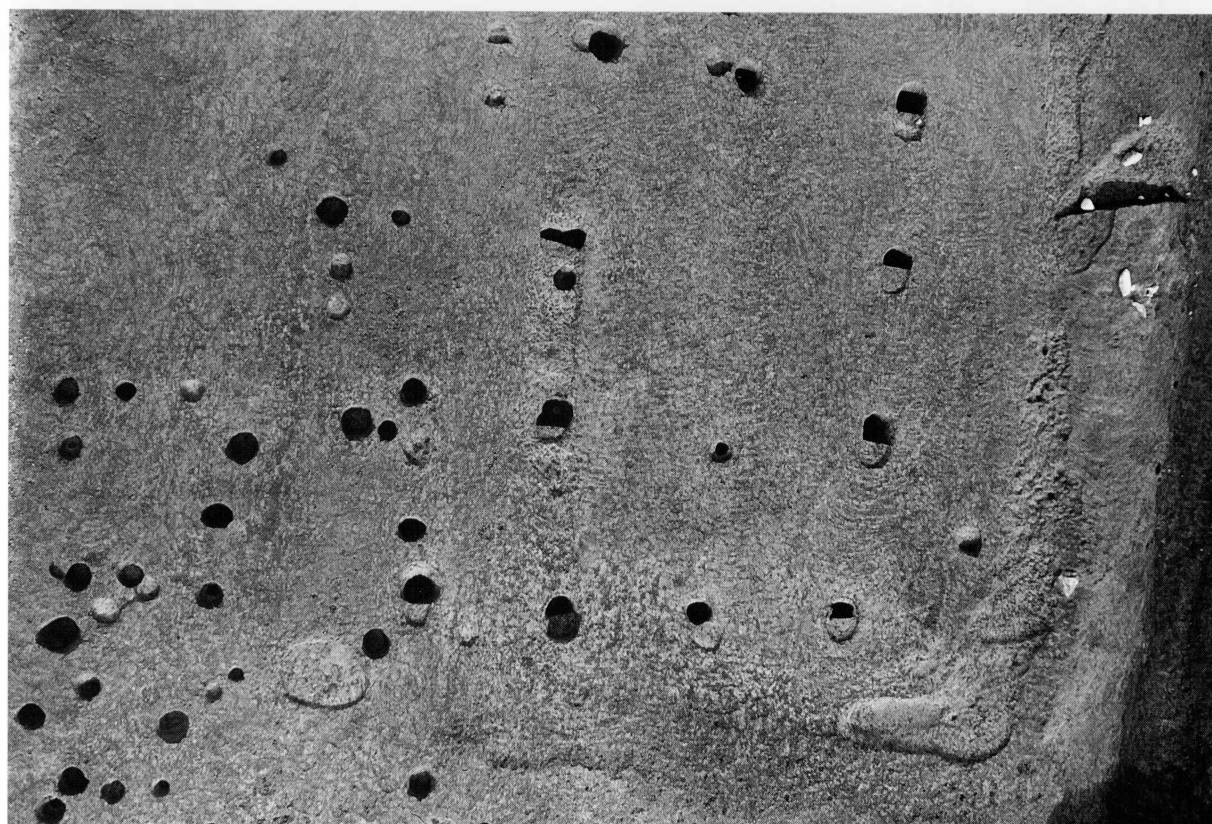
鶴田柗原遺跡第2次調査全景（上が北）



鶴田柗原遺跡第2次調査区西半部（上が北）



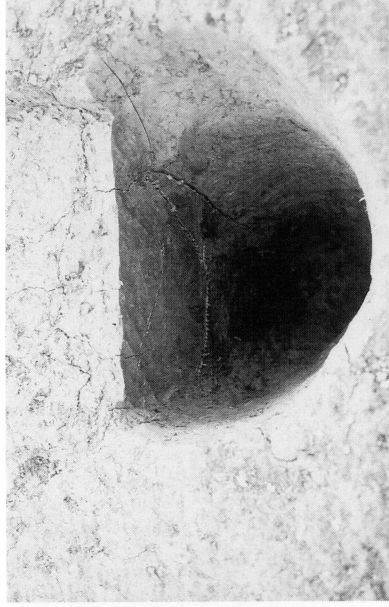
鶴田榎原遺跡第2次調査ST075付近（上が西）



鶴田榎原遺跡第2次調査2SB055ほか（上が北）



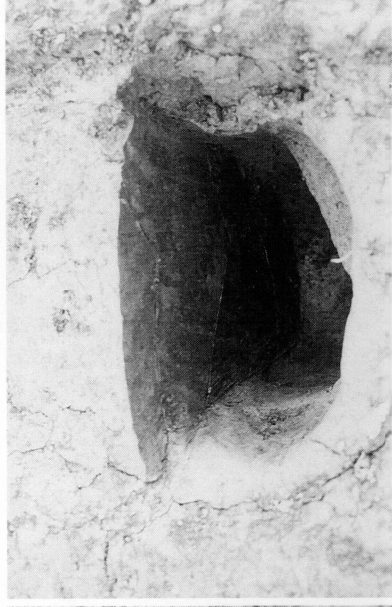
2SB055柱穴a土層観察（北から）



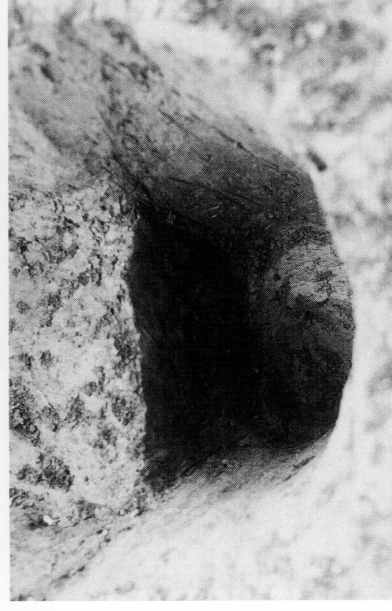
2SB055柱穴b土層観察（北から）



2SB055柱穴c土層観察（北から）



2SB055柱穴d土層観察（北から）



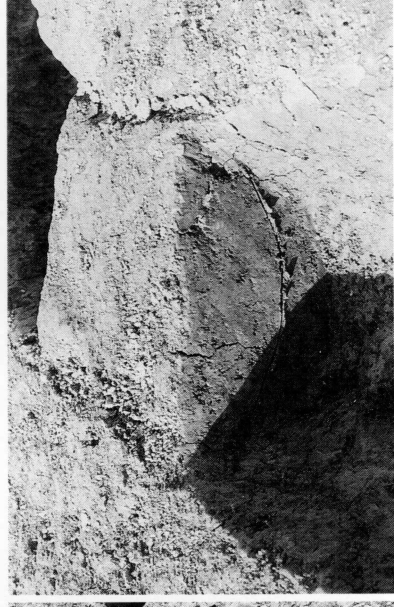
2SB055柱穴f土層観察（北から）



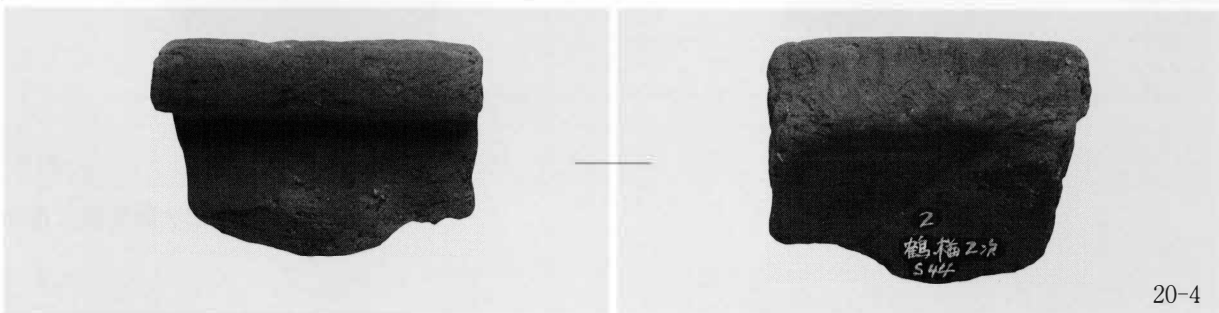
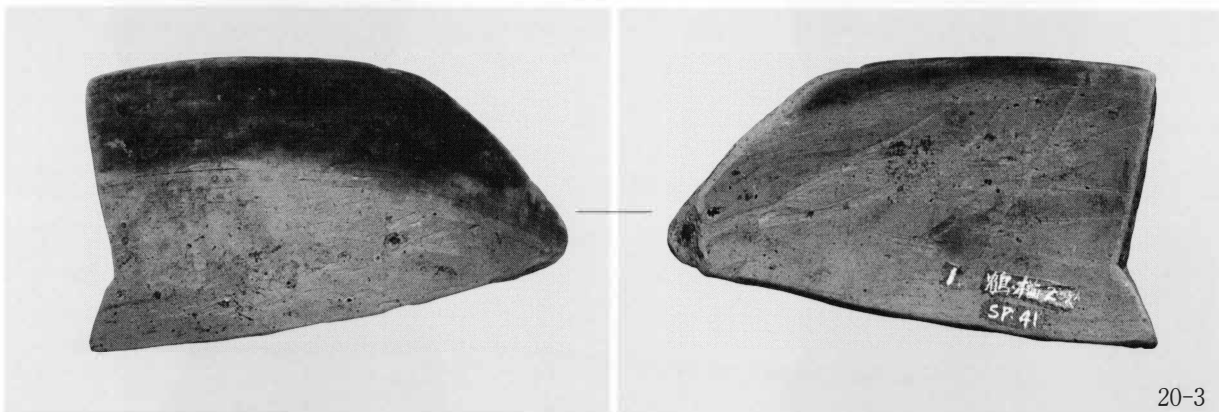
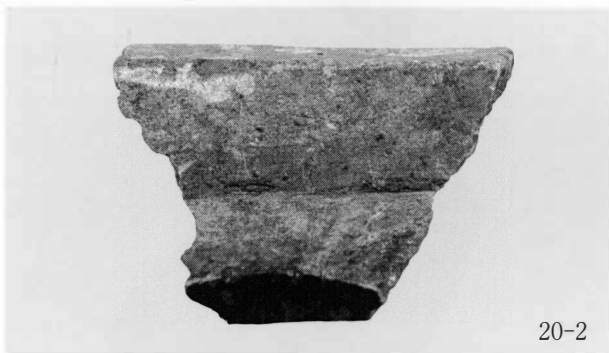
2SB055柱穴g土層観察（北から）

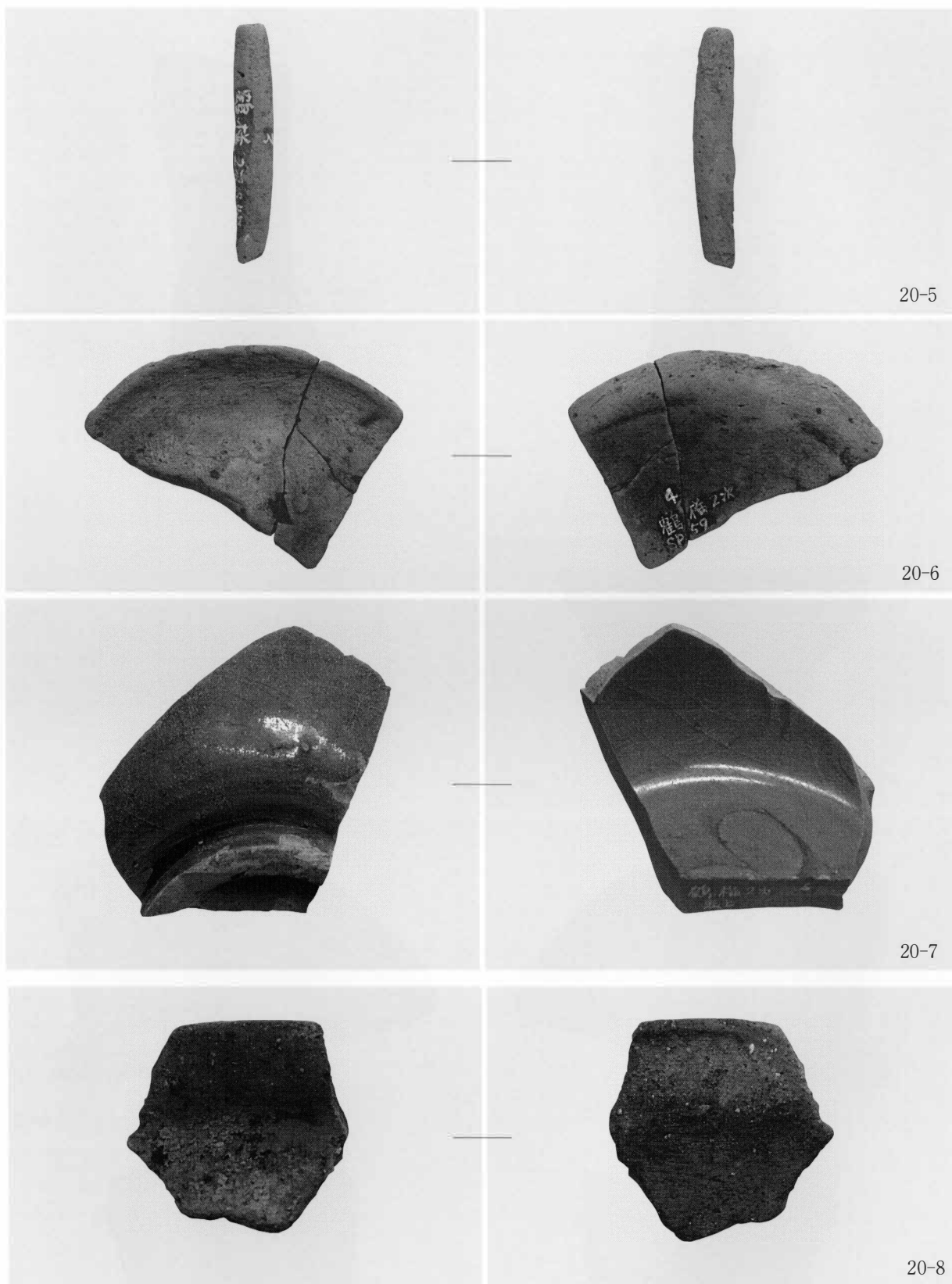


2ST075主体部土層観察（西から）

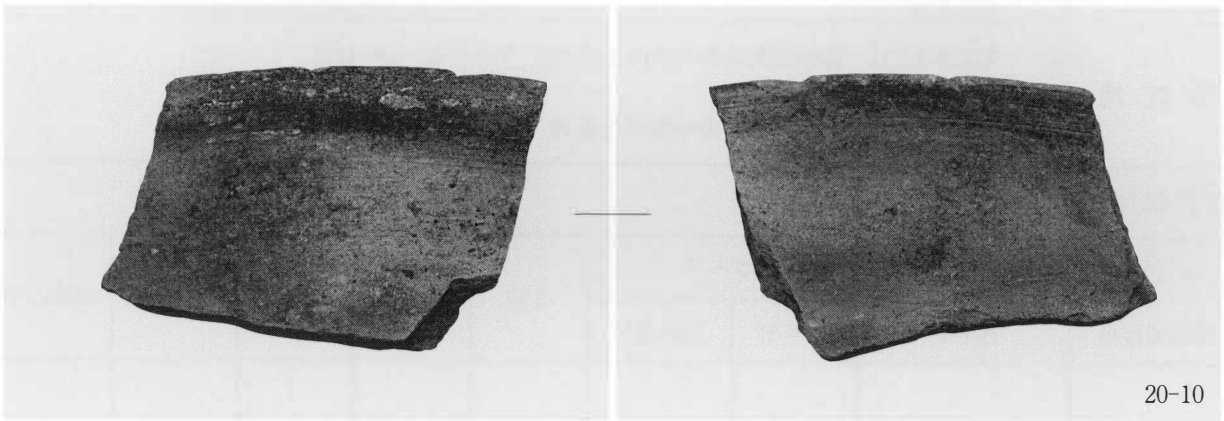
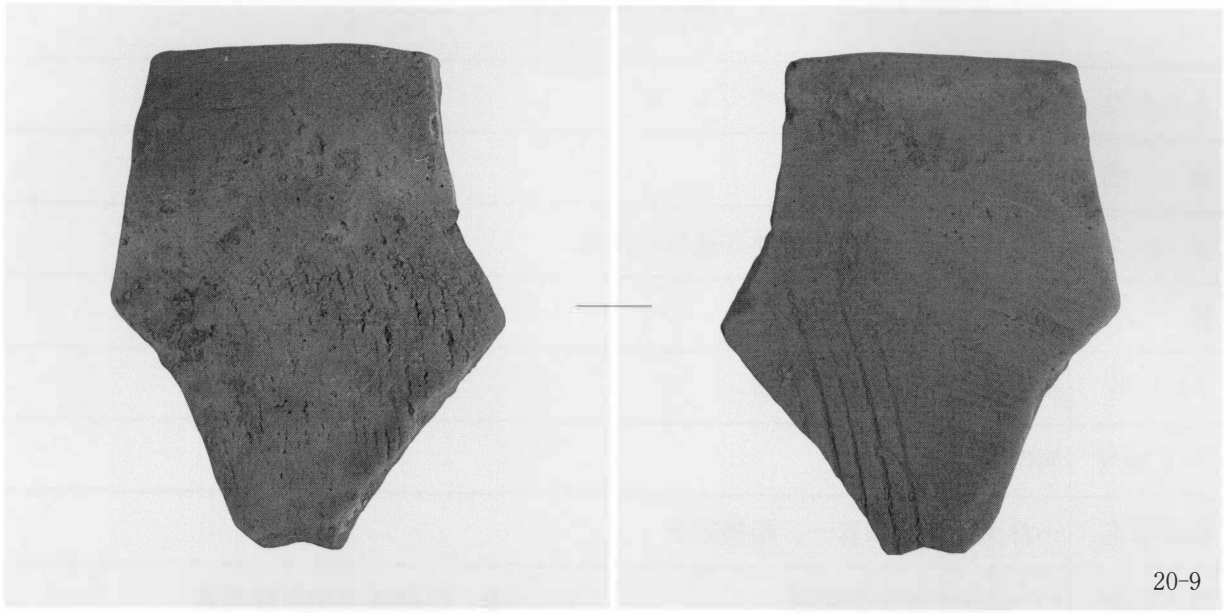


2ST075周溝部土層観察（東から）





鶴田榎原遺跡第2次調査出土遺物



鶴田楯原遺跡第2次調査出土遺物

筑後東部地区遺跡群Ⅸ

筑後市文化財調査報告書 第62集

平成17（2005）年3月

発行 筑後市教育委員会

編集 （財）元興寺文化財研究所

印刷 株式会社 明新社